日本速記法
上に於けるる

漢字音と其の略字法則の研究

貴族院速記士
安田勝藏著

日本速記協會發行

安田勝藏著

日本速記法上に於ける漢字音と其の略字法則の研究

日本速記協會出版部

日本速記法上に於ける

漢字音と其の略字法則の研究

―目　次―

第一章　總　論……一

第一節　漢字の數と其の音……一

第二節　字音の數と其の表……四

第二章　字音の性質と速記文字との關係……一三

第三章　字音と五十音圖との關係……一八

第一節　イ‖キの尾音を伴ふ字音……一九

第二節　キの尾音を伴ふ字音……二三

第三節　クの尾音を伴ふ字音……二三

第四節　ツ‖チの尾音を伴ふ字音……二六

第五節　尾音一覽表……二七

第四章　字音尾の略字法……三三
第一節　イ＝キの尾音を伴ふ字音の略字法……三三
第二節　キの尾音を伴ふ字音の略字法……三六
第三節　クとツの尾音を伴ふ字音の略字法……三八
第五章　熟語と速記文字との關係……三九
第六章　促音の本體は何か……四一
第一節　促音を構成する二條件……四二
第二節　促音と半獨音との關係……四五
第七章　一般熟語尾音省略法……四六
第一節　撥音と二音とより成る熟語……四七
第二節　長音と二音とより成る熟語……五九
第三節　前字の尾音イ＝キと後字二音とより成る熟語……六七
第四節　前後共にキクツの尾音を有する熟語……七〇
第五節　前字はキクツの尾音で後字撥音、長音、イ＝キよりなる熟語……八〇
第六節　キクツの尾音を有するものの疊音より成る熟語……八四
第七節　促音の後字二音より成る熟語……八六
第八節　一音と二音、若くは二音と一音とより成る熟語……九〇
第八章　同行音の熟語略字法則……九一
第一節　後字イの尾音を伴ふもの……九三
第二節　後字の頭音阿段に屬するもの……九七
第三節　後字の頭音伊段に屬するもの……一〇〇
第四節　後字の頭音宇段に屬するもの……一〇一
第五節　後字の頭音衣段に屬するもの……一〇三
第六節　後字の頭音於段に屬するもの……一〇五

	正	誤
一三頁 十四行目	載いて は 戴いての誤	
二六頁 二行目	第四節 ツ＝チを伴ふ字音 は ツ＝チの尾音を伴ふ字音の誤	
三三頁 六行目	イ＝キ音を伴ふ字音の略字法 は イ＝キの尾音を伴ふ字音の略字法の誤	
五九頁 八行目	長音と二音とよりなる は 成るの誤	

緒言

所謂速記の目的を達成する爲に考案せられたる速記文字、及び其の速記文字の速寫率を益〻擴大強化せしむるの目的を以て工夫を凝らされたる種々の略字法則、それ等を總稱したものが速記法である。

其の速記法を巧みに活用し得る重大なる目的の下に多大の日子を費し、之が修練に修練を重ねて完成される所の技術的操作が即ち速記術である。

謂はば法則あつての技術、技術あつての法則、此の二つは兩輪双翼の關係にあつて、其の一を缺いては速記術は成立しない。

けれども何としても其の根本となり土臺となるものは速記法則であるから、其の基礎工事とも謂ふべき大切なる法則をして、彌が上にも完全に完全にと研究を進めて行くことが速記法の進歩であり、速記法の進歩は轉て速記術の進歩を招來せしむる所以であらねばならぬ。

今日日本の速記法は研究者の不斷の努力に依つて進歩の跡を示して居ることは疑ふべくもない事實である。けれども今尙ほ進歩の過程にあつて、未だ幾多研究の餘地の殘されて居ることも亦

第一章　總論

第一節　漢字の數と其の音

三十三間堂のほとけのかずは三萬三千三百三十三體あるとか、昔の俗謠に於て聞かされたことであつて、其の眞僞の程は保證の限りではないが、兎に角多くの佛像が列んでまつられて居ることは事實である。所が漢字の數は康熙字典に據ると、四萬六千二百十六字で補遺備考に收めたるものを合して總計四萬八千六百四十一字と云ふ實に三十三間堂の佛像の數も啻ならぬやうな大數に上ぼつて居る。

勿論此の中には同一の文字であつて、其の體の異なるものがあり、音があつても義のないものもあり、或は音義共に詳ならざるものもある、又書籍の上に於て殆ど使用せられた例のないものさへあつて、此の非常に多數の漢字が悉く世間に通用して居るもののみではない。

本家本元の支那に於てさへもさうであるが、然らば我が國で現今使用して居る漢字數は果して

どの位のものであらうか、其の正確なることは知らないが、今日漢字研究者の權威として知られて居る後藤文學士の著『漢字音の系統』に就いて見ると、

我が小學、中學、其の他諸學校の教科書類、參考書類、衆議院速記錄、其の外諸種の新聞雜誌類などのうちから殘らず漢字を拾ひ網羅して見ても、先づ五千九百五十を以て大體の限度として居る。無論此數は哩、粁などの如き新字、宝、円、当の如き略字、糀、俥、榊の如き日本の國字などをも總て計算したものである。其れ故今日の漢字の整理は、つまりまづ此の五千九百五十の漢字を如何に取り片附くればよいかと云ふことに在るのである。

とあつて、約六千の漢字が現に活用せられて居ると見て差支ない、それにしてもなか〳〵大した數の漢字が用ひられて居るものと言はなければならぬ。而も亦此の多くの漢字が各〻相交錯して幾萬とも數知れぬ程の熟語をも構成して居つて、日常我が國民を惱ますこと實に夥しいものである。ローマ字論や、假名文字論乃至は漢字制限論の起る所以は實にこゝにあつて存するのである。此の漢字の廢止、若くは制限の論は我が國多年の問題であつて、時々火が燃え付くやうに熾に論議せられて居る、さうかと思ふと又いつの間にか姿を消して仕舞ふ、恰も淺間山の噴火のそれの如き觀がある、此の厄介な漢字が廢止せられ、若くは眞に徹底的に制限せられるやうなことが事實行はれ得るならば國家國民の上に及ぼす幸福實に之に過ぐるものはなからう。けれども幸か不幸か此のむづかしい漢字が事實の上に於ては却て益〻多く使用せられるやうな傾向もあり、又新字、新熟語さへもどし〳〵殖えて來て、最新の字典さへも直に其の用を爲さないやうな皮肉な珍現象を呈しつゝある現狀ではないか。

而も其の漢字の讀み方は、所謂音と訓とあるが、此の音と訓がちやんぽんに用ゐられて居るものも隨分ある、例へば烏と云ふ字は口扁をつけると嗚呼**アア**のアとなり、烏賊と書いて**イカ**、烏有と書いて**ウイウ**、烏帽子と書いて**エボウシ**、烏滸と書いて**オコ**と讀む如く、カラスと云ふ字一字が**アイウエオ**とも讀める、斯んな例は幾らでもあつて、訓は訓で同一文字が幾通りにも讀み方があるし、又字音は字音で、漢音、吳音とあつて、偶には唐音や宋音なども用ひられて居る、其の漢吳兩音共に同一のものは問題はないが、其の異なる漢音と吳音が何の區別もなく熟語として讀まれて居るものも相當に數多い。

これで訓の方は今此の問題とは別であるから姑く之を措いて、唯字音のみに付て稽へて見ると、漢字が縱令一部の制限を受けても、其の字音なるものが我が國民の言語の上に生命のある限り、其の言語をも一の對象として成り立たなければならない我が日本速記法の上に此の字音の研

究と、進んでは之が對策を講ずることの必要は敢て言ふまでもないことである。

第二節　字音の數と其の表

漢字の數は前に述べた通り殆ど五萬に近い多數であるが、併し其の漢字の總てが各〻異つた字音を有して居るものではない、所謂同音異義の文字が非常に多いのであつて、中には例へば**ロツ**(律)と云ふやうな聞いたこともないやうな音もあり、又**ヒヨク**と云ふやうな音は逼とか愎と云ふやうな唯僅に二三字にしか配當せられて居ないで而も不斷用ゐられないやうなものがあるが、多いのになると同一の音が數百字にも配當せられて居るやうなものもある。

然らば其の字音の種類はどれだけあつて、此の幾萬の漢字に配當せられて居るかと云ふと、御承知の通り字音と云ふものは我が國では漢音も、吳音も、何等區別なく併用せられて居るのであるから、速記法上亦之を區別して研究するの必要はない、故に茲には漢音、吳音の區別なく其の字音の種類と其の數を悉く列擧して見ると次の通りである。

表中上の假名は字音であつて、下の漢字は上の字音に對する唯一例を示したに過ぎぬものである。

字音表

あ	阿・	あい	愛	あく	握	あつ	壓	あん	安
い	伊	ね	位	ねき	域	いく	育	いつ いち	逸
いん	印	ねん	院	う	宇	うつ	鬱	うん	雲
え	衣	ゑ	惠	えい	影	ゑい	衛	えき	益
えつ	閱	ゑつ ゑち	越	えん	炎	ゑん	圓	お	於
を	乎	おく	億	をく	屋	おつ	乙	をつ	越
おん	恩	をん	溫	おう	櫻	あふ	押	おう	應
おふ	凹	わう	往	か	加	くわ	火	かい	改
くわい	快	かく	角	くわく	畫	かつ かち	褐	くわつ	括
かん	函	くわん	冠	が	賀	ぐわ	瓦	がい	害
ぐわい	外	がく	學	ぐわつ	月	がん	岩	ぐわん	願
き	喜	ぎ	義	きく	掬	きつ きち	吉	きん	金
ぎん	銀	きやく	脚	ぎやく	逆	きう	休	きゆう	宮

きう　急　ぎう　牛　きよ　去　ぎよ　御　きやう　杏
きよう　競　けう　教　けふ　協　ぎやう　仰　ぎやう　藝
げう　堯　げふ　業　きよく　曲　ぎよく　玉　く　苦
ぐ　愚　くう　空　くつ　屈　くん　君　ぐう　遇
ぐん　群　け　希　げ　下　けい　警　げい　凝
けき　郤　げき　劇　けつ　血　げつ　月　けん　健
げん　言　こ　古　ご　伍　かう　好　かふ　甲
くわう　廣　こう　後　こふ　鵠　がう　號　がふ　合
ごふ　業　こく　國　ごく　獄　こつ　骨　ごつ　兀
こん　坤　ごん　權　さ　佐　さ　坐　さい　才
さい　材　さく　策　さく　荐　さつ　札　さつ　雑
さん　産　ざん　殘　し　絲　じ　次　しい　紙
しき　式　じき　食　しつ　質　じつ　日　しん　信
じん　人　しや　紗　じや　邪　しやく　爵　じやく　雀

ちやく　着　しよ　初　じよ　如　ちよ　女　しよく　職
じよく　辱　ちよく　匿　しゅ　主　じゅ　戍　しゅく　祝
じゅく　熟　しゅつ　出　じゅつ　述　しゅん　春　じゅん　巡
しう　修　しゅう　終　しふ　拾　じう　柔　じふ　十
ちゅう　重　しゃう　相　しょう　承　せう　笑　せふ　捷
じゃう　上　じょう　冗　ぜう　擾　ぢやう　場　ぢよう　醸
でう　條　でふ　帳　す　須　すう　趨　すね　粹
ずね　隨　すん　寸　せ　世　ぜ　是　せい　勢
ぜい　贅　せき　籍　せつ　節　ぜつ　舌　せん　先
ぜん　前　そ　曾　ぞ　酬　そう　走　さう　掃
さふ　挿　ぞう　贈　さう　造　ざふ　雑　そく　束
ぞく　續　そつ　卒　そん　損　ぞん　存　た　多
だ　陀　たい　對　だい　大　たく　澤　だく　濁
たつ　達　だつ　脱　たん　丹　だん　段　ち　地

ぢ 持 ぢき 直 ちく 畜 ぢく 笠 ちつ 腔
ぢつ 眠 ちや 茶 ちやく 著 ちう 霊 ちゆ 哇
ちゆつ 黜 ちゆう 仲 ちふ 蟄 ちよ 著 ちやう 提
ちよう 澄 てう 趙 てふ 帳 ちよく 直 ちん 沈
ぢん 塵 つ 都 づ 圖 つう 通 つゐ 墜
てい 丁 でい 泥 てき 敵 でき 溺 てつ 鐵
てん 天 でん 傳 と 登 ど 努 とう 投
たう 刀 たふ 答 どう 同 だう 導 とく 徳
どく 毒 とつ 突 とん 頓 どん 鈍 な 那
ない 内 なつ 捺 なん 南 に 二 にく 肉
にち 日 にやく 蒻 にう 柔 にゆう 乳 にふ 入
によ 如 にやう 娘 によう 女 ねう 尿 ねふ 捻
にん 忍 ぬ 奴 ねい 嚀 ねつ 熱 ねん 年
のう 能 なう 嚢 なふ 納 は 波 ば 馬

はい 配 ばい 倍 はく 白 ばく 駁 はつ はち 鉢
ばつ 閥 はん 犯 ばん 晩 ひ 比 び 美
ひき 匹 ひつ 畢 びつ 醯 ひやく 百 ひよく 逼
ひやう 兵 ひよう 氷 へう 表 べう 苗 びやう 病
びよう 憑 びゆう 謬 びん 貧 びん 敏 ふ 府
ぶ 撫 ふう 風 ふく 服 ふつ 沸 ぶつ 佛
ふん 分 ぶん 文 べ 部 へい 兵 べい 米
へき 壁 べき 纂 へつ 徹 べつ 別 へん 邊
べん 勉 ほ 保 ぼ 母 ほう 鳳 はう 報
はふ 法 ほふ 法 ぼう 眸 ぼふ 乏 ばう 暴
ほく 北 ぼく 僕 ほつ 發 ぽつ 勃 ほふ 本
ぼん 盆 ま 麻 まい 徠 まく 幕 まつ 末
まん 萬 み 味 みつ 密 みやく 脈 みやう 明
めう 妙 みん 民 む 武 め 碼 めい 明

めつ　滅　めん　面　も　茂　もう　濛　まう　毛
もく　目　もち　勿　もつ　物　もん　門　や　野
やく　厄　ゆ　由　いう　尤　いふ　邑　ゆう　雄
ゆゐ　唯　よ　豫　よう　用　やう　羊　えう　要
えふ　葉　よく　抑　ら　羅　らい　來　らつ　埒
らん　亂　らく　落　り　離　りき　力　りく　陸
りつ　律　りやく　略　りう　留　りゆう　隆　りよ　慮
りよう　龍　りやう　良　りふ　立　りよく　綠　りん　倫
る　留　るゐ　類　れい　禮　れき　歷　れつ　列
れん　練　れう　聊　れふ　獵　ろ　呂　ろう　弄
ろつ　ろち　律　らう　老　らふ　拉　ろく　碌　ろん　論
わ　和　わい　隈　わく　惑　わつ　斡　わん　腕

以上を計算すると丁度四百五と云ふ數になる、是が略ぼ字音の全體であるやうに思はれる。それで漢字の數が四萬あらうが五萬あらうが、其の一つ一つの字音は以上の四百五種の中の何れかより外にはないと云ふことになる、言ひ換へれば約四百種の字音が四萬八千有餘の漢字に配當せられて居る譯であるから、平均百二十字ばかりの各〻異つた文字が組合つて一つの字音を有つて居るとも言へるし、又逆に言ふと、一つの字音が平均百二十字に對する共通の音であるとも言へるのである。

第二章　字音の性質と速記文字との關係

以上約四百種の字音を大別すると、即ち

一字一音のもの、　一字二音のもの、とになる。

そこで一字一音のものは、速記文字としても亦之を一字で現すことが出來るし、又一字一音のもの同士が二つ以上互に結付いて、所謂熟字を構成する場合には、五十音圖縮字法なり、疊音略字法なり、連濁略字法なり其の他種々の略字法則が制定せられて居る、勿論それ等の方式も亦字音略字法の一種に相違ないのであるから、字音略字法として研究すべきであるが、それは既に或る程度までは稍〻解決し盡されて居ると言つても宜いのであるから、茲に字音略字法として研究する上からは、此の一字一音のものは姑く之を除外することにする。

さうすると此の後に殘るものは一字二音のものである、此の一字二音のものを速記文字で書かうとすると、長音なり拗音の中の或るものは幸に之を一字で書き現すことも出來るが其の他のものは別に何か特殊の略字の無い限りは、どうしても之を二字づつで書き現さなければならぬ、それは實に迂遠極まることである。迂遠極まるからと云つて、何千とも何萬とも數知れぬ熟語に向つて一々特殊の略字を作製することは不可能であらう、縱し不可能でないとしても、何等根據もなく系統もない御都合主義の略字であつては吾人の記憶は到底之を許さない、而して又實際に直面して却てまご付くやうな略字、誤譯の虞あるやうな略字が何萬何千あつても害にこそなれ決して役立つものではない、寧ろ迂遠な方法でも二字づゝ其のまゝ綴つて習熟した方がましである、そこでさう云ふ御都合主義な無理もせず簡單にして而も明確なる略字法則を考案することは出來ないものであらうか、と云ふのが本研究の眼目である。

そこで先づ此の字音略字法則の研究を始むるに當つて、何より先きに其の一字二音の字音は一體どう云ふ音に依つて組立てられて居るか、其の字音の性質なるものを明かにしなければならぬ。

それには先づ一字二音のものだけを一々解剖的に上の音と、下の音とを兩斷して區別をする。（以下說明の便宜上、其の上の音を頭音と稱し、下の音のことを尾音と呼ぶことにする）

さうすると頭音の方は後に精しく說明するが、清音、濁音、拗音の悉くではないが、殆ど全部の音を頭音として載いて居ると言つて差支ない程、其の種類が多いに拘らず、下の尾音の方は誠

に限られた僅かの數よりないことを發見するのである。例へば茲に一字二音から成立つて居る漢字の全部幾萬と云ふものを悉く列べて見ても其の各〻の有する所の尾音は、結局左の假名文字の十三種の音の何れかに屬せざるものはない。

イ【愛】　**キ**【推】　**ウ**【唐】　**キ**【的】　**ク**【國】　**ツ**【質】　**チ**【日】

フ【甲】　**ヤ**【謝】　**ユ**【主】　**ヨ**【躇】　**ワ**【果】　**ン**【憲】

上の假名で書いてあるのが即ち尾音であつて、下の漢字は其の尾音を有するものの一例を擧げたに過ぎないのである。二音から成立つて居る漢字であつたならば必ず以上十三種の尾音の何れかゞ基礎になつて居ないものは他に一つもないと云ふ此の事實を忘れてはならぬ。

所で是等の尾音を伴ふ所の字音を速記眼を以て一瞥するならば

イウ【有】　**カウ**【高】　**ガフ**【合】　**カフ**【甲】

等の如く尾音に**ウ**、**フ**の音を伴ふ字音の場合には、所謂長音となるし、又

シヤ【奢】　**シユ**【朱】　**ショ**【署】　**クワ**【華】

等の如く、尾音に**ヤ**　**ユ**　**ヨ**　**ワ**を伴ふ字音の場合は總て拗音となる。

それから又前に**ウ**　**フ**の尾音を伴ふ字音は長音となると云ふことを述べたが、是は實は單なる長音ばかりでなく

ギウ【牛】　**シフ**【襲】

の如く長拗音となり、又

チヤウ【長】　**キユウ**【宮】　**クワウ**【皇】

の如く本來の拗音を構成して居る上に尙ほ**ウ**の尾音を添加することに依つて是亦長拗音となる。

以上の如く**ウ**　**フ**　**ヤ**　**ユ**　**ヨ**　**ワ**の六種の中、何れかの尾音を附隨する字音は必ず長音若くは拗音を構成するのであつて、此の長音なり拗音は、我が速記文字の上に於ては幸に一字として取扱はれて居るのであつて、單なる一字一音の字音と其の書方に於て何等擇ぶ所がないのであるから、以上六種の尾音を有する字音は、此の字音略字法研究の中から今暫く之を省いて置いて宜しいことになる。

さうすると殘る所の字音は

イ　**キ**　**ク**　**チ**　**ツ**　**ン**

と云ふ七種の尾音となる。

そこで尙ほ考へなければならぬことは**イ**と**キ**の區別であるが、**イ**と**キ**は字音としての區別はあ

るけれども、速記文字としては其の區別の必要はないのであるからイと牛は一つとして研究して宜しいことになる。

それから尙ほもう一つ考へなければならぬことは尾音のツとチの關係である。

ツとチは字音としては別であるけれども、其の尾音の生れた元の字は一つである。即ち同一の文字に附いて居る所の尾音であることを忘れてはならぬ。例へば

逸は　漢音　イツであり　　呉音　イチである

越は　漢音　エツであり　　呉音　エチである

斯の如くツとチの尾音は唯漢音と呉音の相違である、是は速記法の上では一つと視て宜しいのであるから、是は共通のものとしてツを以てチの代表音として研究することにする。

併し茲に注意すべきことは、ツとチの尾音は漢音と呉音共通であつても、其の頭音は必ずしも、前に示したやうに同一音と限つたことはない。例へば

日は　漢音　ジツであつて　　呉音　ニチである

勿は　漢音　ブツであつて　　呉音　モチである

と云ふやうに尾音のツとチは共通であるけれども、其の頭音は全然異つて居るものもあると云ふことを知らなければならぬ。

所で最後にもう一つ考へなければならぬ問題がある。それはンの尾音を有する字音、即ち撥音である。撥音は我々の速記法に方ては、其の頭音の字の尾端を撥ねることに依りて完全に現されることになつてゐる、此の方式は誠に理論と實際に能く合致した理想的の書法なりと自分は信じて居るから、唯單なる撥音には此の上何等手を加へるの必要を認めない、恰も一字一音のものと同一に取扱つて宜いから、是亦字音略字法中の尾音の研究としては之を省いて宜いことになる。

以上の如く段々と字音の性質を檢討して見ると、略字法として研究すべき字音は、其の尾音十三種の中から以上九種が除外されて、結局殘る所のものは

イ　キ　ク　ツ

の四つの尾音を有する字音だけになる。

第三章　字音と五十音圖との關係

以上は唯字音の性質の半面を明かにしたに過ぎない、字音と云ふものは前に述べたやうな尾音だけに一定の音があるのではなくて、其の半面に於てそれ等の尾音と結び付くところの頭音にも亦一定の規矩準繩の存するものがあつて、五十音の總てに對して無暗に雜然と結び付て字音を構成して居るものでないことを知らなければならぬ、此の頭尾兩音の關係を明かにすることに依つて初めて字音全體の性質を知ることが出來るのである。

然らば其の尾音のイ　キ　ク　ツに結付く所の頭音は如何なるものであるか、又如何なる規則の下に此のイ　キ　ク　ツの尾音を有する字音が構成せられて居るかを檢討しなければならぬ。それには唯漫然と字音表の總てを眺めて居つたのでは、何處にどう云ふ規則づけられたものが存するかと云ふことは分かるものではない、之を明かにしようとするならば、先づ字音と五十音圖との關係を明かにすることが必要になつて來る。

五十音圖と云ふのは、我が國の純粹なる音五十音を聲音の分類に依つて、ア　イ　ウ　エ　オの五段とア　カ　サ　タ　ナ　ハ　マ　ヤ　ラ　ワの十行に配列した圖表であることは既に御承知の通りであるが、此の配列の方法は印度の悉曇即ち梵語の母韻に基いて慈覺大師などの作成したものであらうとのことである、又一說には、奈良朝に於て吉備眞備の作りしものなりと云ふ古よりの說なれども確證なし、とのことである、先づ何れにしても我が日本人の作成したものであることは確かである。又字音の方は、小學紺珠に、孫炎始作字音とあつて、字音と五十音圖とは同より何等の關係もなく、全く別の方面に於て各〻作製せられたものであるけれども、字音研究の歩を進めるに從つて此の兩者の間に誠に奇しき因緣關係の存在することを發見するのである。

此の關係を明かにすることに依つて初めて茲に我が日本速記法上に於ける字音の取扱を如何にすべきか、其の略字法則の根據を確實に攝むことが出來るではなからうかと思ふ。

然らば字音と五十音圖との關係が如何なるものであるかを表に作つて見よう。

第一節　イ＝ヰの尾音を伴ふ字音

阿段　伊段　宇段　衣段　於段

アイ（愛）　（絶無）　エイ（榮）　（絶無）

カイ（海）　ケイ（形）
クイ（街）　ゲイ（藝）
ガワイ（會）
グワイ（外）

サイ（裁）　スキ（推）　セイ（勢）
ザイ（罪）　ズキ（瑞）　ゼイ（喘）

タイ（體）　ツキ（墜）　テイ（叮）
ダイ（大）

ナイ（內）　ネイ（嚀）

ハイ（肺）　ヘイ（兵）
バイ（梅）　ベイ（米）

マイ（每）　メイ（命）

ユキ（唯）

ライ（來）　ルキ（類）　レイ（令）

ワイ（猥）

イ＝キを附隨する字音は以上の通り之を五十音圖に配當して見ると、頭音が阿段と宇段と衣段の三段に限られて居つて、伊段と於段に屬するものは絶對にない。

所で茲に一つ考へなければならぬことは、衣段に屬するエイ　ケイ　セイ　テイ　ネイ　ヘイ　メイ　レイは文法上長音でなくても速記法上之を長音化して取扱ふべきであつて、例へば形勢はケーセーと書くべきであつて、わざ〳〵ケイセイとイを書くのは賢明なる書方ではない、當然長音として取扱ふべきであるから、結局イ＝キの尾音を伴ふ所の字音は阿段のヤを除いた他の全部、即ち

アイ　カイ　サイ　タイ　ナイ　ハイ　マイ　ライ　ワイ

の九つと、宇段に屬する

スキ　ツキ　ユキ　ルキ

の四つ、計十三種に過ぎないと云ふことになる。繰返して言ふ、漢字は何萬あらうとも、其の尾音にイ＝キを伴ふ字音は衣段を除くと以上の十三種より外にはないことになる。

勿論イ＝キの尾音を有する字音で〈の附してある

ガイ　ザイ　ダイ　バイ　ズキ

等の濁音もあるが、濁音の取扱は加點法なり、濃線なり、それ〳〵の速記法則に從へば宜いのであつて問題にはならないから一つと見る。

それから**クワイ　グワイ**の拗音もあるが、是は速記法上に於ては**カイ　ガイ**と轉訛すべきが當然であるから是亦一つと見る。

第二節　キの尾音を伴ふ字音

阿段	伊段	宇段	衣段	於段
（絶無）		（絶無）	**エキ**（益）	（絶無）
			ゲキ（擊）	
	シキ（識）		**セキ**（隻）	
	ヂキ（直）		**テキ**（敵）	
			デキ（溺）	

リキ（力）　　**ヘキ**（僻）

キキ（域）　　**ベキ**（冪）

レキ（歴）

キと云ふ尾音を附隨する字音は以上の如く唯伊段と衣段のみに限られて居つて、他の三段には絶對にない、而も其の數僅かに伊段に三つと、衣段に六つ、計九種に過ぎない。

第三節　クの尾音を伴ふ字音

阿段	伊段	宇段	衣段	於段
アク（惡）	**イク**（育）	（絶無）		**オク**（億）
				ヨク（屋）
カク（角）	**キク**（掬）			**コク**（國）
ガク（學）				**ゴク**（獄）
クヮク（畫）				

サク（策）　シク（シクノ字音ナシ）　ソク（則）
シュク（祝）　ゾク（賊）
ジュク（熟）
タク（宅）　チク（畜）　トク（徳）
ダク（濁）　ヂク（軸）　ドク（毒）
ニク（肉）
ハク（博）　フク（福）　ホク（北）
バク（漠）　ボク（僕）
マク（膜）　モク（目）
ヤク（約）　ヨク（慾）
ラク（樂）　リク（陸）　ロク（碌）
ワク（惑）

クの尾音を附隨する字音は、五段の中衣段だけは絶對にない、さうして宇段には唯フクと云ふ字音があるのみであるが、兎に角衣段を除いた他の四段に跨つて居る。

それから尙ほ此の外にクの尾音を附隨する字音は拗音にある。

阿段	伊段	宇段	衣段	於段
キャク（脚）	（絶無）		（絶無）	キョク（旭）
ギャク（逆）				ギョク（玉）
シャク（爵）		シュク（祝）		ショク（食）
ジャク（弱）		ジュク（熟）		ジョク（辱）
チャク（著）				チョク（勅）
				ヂョク（匿）
ヒャク（百）				ヒョク（逼）
ニャク（蒻）				
ミャク（脈）				
リャク（略）				リョク（綠）

宇段のシュクは速記法上シク　ジュクは轉訛して取扱ふのであるから、之を省くと結局拗音でクの尾音を附隨するものは阿段と於段だけだと言つても宜い。

要するにクと云ふ尾音を伴ふ字音は拗音を合せて三十六種の多きに達する。

第四節　ツ―チを伴ふ字音

阿段	伊段	宇段	衣段	於段
アツ（壓）	イツ（逸） チツ	ウツ（鬱）	エツ（謁） エツ チツ（越）	オツ（乙） ヲツ（越）
カツ（割） クヮツ（活） グヮツ（月）	キツ チツ（吉）	クツ（屈）	ケツ（缺） ケツ ゲツ（月）	コツ（骨） ゴツ（滑）
サツ（察） ザツ（雜）	シツ チツ（質） ジツ（實）		セツ（說） ゼツ（舌）	ソツ（卒）
	シュツ（出） ジュツ（述）			
タツ（達）	チツ（秩）		テツ（鐵）	トツ（突）
ダツ（脫）	ヂツ（昵） チュツ（黜）			
ナツ（捺）	ニチ（日）		ネツ（熱）	
ハツ（發） バツ（罰）	ヒツ チツ（畢） ビツ（醱）	フツ（沸） ブツ（佛）	ヘツ（徹） ベツ（別）	ホツ（發） ボツ（勃）
マツ（末）	ミツ（密）		メツ（滅）	モツ（物）
ラツ（埒）	リツ（率）		レツ（列）	ロツ（律）
ワツ（斡）				

ツの尾音を附隨する所の字音は、之を五十音圖に配當して見ると、多い少いはあるが悉く各段に渉つて居る、斯の如く各五段に渉つて配當されて居る字音は、唯獨り此ツの尾音を附隨する字音に限られて居る。而して其數は三十四種であつて、數の上から言ふと、第三のクを附隨する字音數よりは稍〻少いのである。

第五節　尾音一覽表

要するに漢字の數は、四萬八千字の多きに達して居るが、それ等の有する字音は約四百種であ

つて、其中一字一音のもの及びヤ ユ ヨ ワの尾音を有する所の拗音、それからウ フの尾音を有する所の長音、ンの尾音を有する所の撥音等を除くと、殘る所のものは

イ(ヰ) キ ク ツ(チ)

の尾音を有する所の字音のみであることは前節の五十音圖に對する尾音配當圖に依つて明かである。今其の各〻の配當圖を一纏めにして一覽表を作つて見ると左の通りである

尾音一覽表

ア ツクイ 壓惡愛	カ ツクイ 喝角改	ク ワツクイ ワツクイ 括畫快	ガ クイ 學害
イ ツク 逸育	キ ツク ツ(チ) 詰拗		ギ
ウ ツ 薈	ク ツ 風		グ
エ ツキイ ツ(チ) 越益英	ケ ツイ 穴警		ゲ ツキイ 月劇藝
オ ツク 乙億	コ ツク 骨國		ゴ ツク 鳅獄

サ ツクイ 札作才	シ ユツキ ツク 宿室式	ス キ 粹	セ ツキイ 說籍勢
ザ ツイ 雜材	ジ ツ 實	ズ キ 隨	ゼ ツイ 舌贅
タ ツクイ 達澤對	チ ツク 膣畜	ツ キ 墜	テ ツキイ 鐵敵丁
ダ ツクイ 脫濁大	ヂ クキ 笠直	ヅ	デ キイ 溺泥
ナ ツイ 捺内	ニ チク 日肉	ヌ	ネ ツイ 熱寧
ハ ツクイ ツ(チ) 鉢白配	ヒ ツ 畢	フ ツク 沸服	ヘ ツキイ 儆壁兵
バ ツクイ 罰駁倍	ビ ツ 醴	ブ ツ 佛	ベ ツキイ 別羃米
			ホ ツク 發北
グ ワツイ 月外			木 ツク 勃僕

マ ツクイ 毎		ミ ツ 密	メ ツイ 明	モ ツク(チ) 目	
末幕			滅	物	
ヤ ク 厄		ユ キ 唯		ヨ ク 慾	
ラ ツクイ(チ) 埒落來		リ ツクキ 律陸力	ル キ 類	レ ツキイ 列歴禮	ロ ツク 律碌
ワ ツクイ 幹惑隈		牛 キ 域		エ ツ 越	ヲ ツク 乙億
ニャク 蒟					
ミャク 脈					
リャク 略					リョク 綠
キャク 脚					キョク 曲
ギャク 逆					ギョク 玉
シャク 爵					ショク 職
ジャク 雀					ジョク 辱
チャク 著					チョク 直
ヒャク 百					ヒョク 遇

右一覽表に見る如く

阿段には　イ　ク　ツの尾音を伴つて居るが、キの尾音を有するものは絶對にない。

伊段には　キ　ク　ツの尾音を伴つて居るが、イの尾音を有するものは絶對にない。

宇段には　ク　ツ　牛の尾音を伴つて居るが、キの尾音を有するものは絶對にない。

衣段には　キ　ツの尾音を伴つて居るが、クの尾音を有するものは絶對にない。（イは長音化するから省く）

於段には　ク　ツの尾音を伴つて居るが、イとキの尾音を有するものは絶對にない、

之に依つて之を觀ると、各段に於てイ　キ　ク　ツの各尾音を悉く伴つて居る字音は一つもない、必ずイ　キ　ク　ツの尾音の中何れかの一つ或は二つが缺けて居る。

更に又之を別の觀點から研究すると、

イ＝牛の尾音を伴ふ字音は、衣段の長音化するものを除くと阿段と宇段のみに限られて居る。

さうして拗音、濁音のものは一つと見て其の數僅に十三種に過ぎない。

キの尾音を伴ふ字音は伊段と衣段とに限られて居つて、其數濁音のものを一つと見九種に僅てクの尾音を伴ふ字音は衣段のみには絶對になくて、他の阿伊宇於の四段に亘つて、是亦濁音のものを一つと見て其の數三十六種ある。

ツの尾音を伴ふ字音は、各五段共に存在して居つて其の數三十四種に及んで居る。濁音を一つと見ることは前の通りである。

そこでクの音を伴ふ字音が衣段には絶對に無いに拘らず、其の音種の最も多いのは、其の頭音が拗音にも及んで居るからであつて、ツの尾音は各五段に亘つて居るに拘らずクの尾音數よりも少いのは拗音を頭音とするものはシユツとジユツとチユツの三種だけで、それも速記法上に於てはシツ、ジツ、チツと轉訛されるので、殆ど絶無だと言つても宜い程であるからである。

要するに以上五十音圖に配當されたる字音尾の特殊性こそは字音略字制定の上に一大注目を要する大事な點であらねばならぬ。

第四章　字音尾の略字法

以上に依りて先づ字音とは如何なる性質のものであるか、其の本質と、さうして又其の字音と速記文字との關係に付ての大體を明かにすることが出來た。

然らば愈〻是より進んで此のイ　キ　ク　ツの尾音を伴ふ所の字音を速記法上如何なる手段方法によりて其の略字法則を決定すべきかに付ての研究に歩を進めなければならない。

第一節　イ＝ヰ音を伴ふ字音の略字法

イ＝ヰの尾音を伴ふ字音は、其の頭音は阿段　宇段　衣段に跨つて居るが、其の中衣段に屬するもの、エイ　ケイ　セイ等の如きものは、前にも述べた通り速記法上に於ては是等は總て之を長音化して取扱ふのであるから、字音略字としては別に問題はない。故に之を除外すると殘る所のものは阿段を頭音とする

アイ　カイ　サイ　タイ　ナイ　ハイ　マイ　ライ　ワイ

の九つと、字段を頭音とする

スキ　ツキ　ユキ　ルキ

の四つのみである。

是等の字音は、之を速記文字で書き現はさうとするには、頭音字に尾音の**イ**の字を添加するか或は今日まで略字化されたものでは**イ**の變形である何等かの記號を添加して僅に省畫法として滿足して居つたものであるが、此の字音省略法に於ては唯其の頭音の文字の尾端を聊か變形して、此の尾音の**イ**＝**キ**の字は全然省略をし、又それに代るべき何等の記號をも添加しないことを原則とする。例へば

カイ

と云ふ字音ならば、先づ其の頭音の**カ**の字の尾端を筆を止めないで、倍の長さまでに輕く書き流すのである。又反對に**カ**の字の長さを半減したものを以て之に宛てることも出來るから、何れを採つても宜い譯であるが、兎に角何故倍の長さに延長して流すかと云へば、今日の速記法では撥音は**カ**の字の尾端を特に上へ撥ね上げないで短く其の儘細く書き流すことになつて居るから、其の撥音との區別を聚然たらしむる爲である。

其の尾端が長く輕く書き流されてあることに依つて、其の**カ**の字の終りに**イ**の尾音が伏在するものなることを約束づければ足りるのである、換言すれば**カ**の字が長く輕く書き流されてあるならばそれは**カン**でなく**カイ**と讀むべきである。

サイ　タイ　ナイ　ハイ　マイ　ライ

等皆同じ筆法であることは勿論である。

但し　**アイ**と**ワイ**は之を一つに共通せしめて差支ないから之を一つとして、特に**ワ**の字の反對の方向を向いた字を以て共通略字とする。

次に字段を頭音とする

スキ　ツキ　ユキ　ルキ

であるが、複畫式に於ては其の頭音の文字の尾端、即ち其の結ぶべき母音符**ウ**を結ばないで、且つ止まらないで是亦前の筆法と同樣其儘**ウ**の母音符を輕く眞直ぐに上に書き流せば宜い、さうして結合しなければならぬ**キ**の字は全然之を省略することが出來る。

以上は勿論字音略字として制定したものであるけれども、必ずしも字音のみに限定する必要はない、廣く國音にも應用する、就中形容詞に其の應用範圍が廣い、例へば阿段の方では：**アカイ**

クサイ、イタイ、カライとか、字段の方では、ヒクイ、ウスイ、アツイ、サムイ、カユイ、ユルイ等の如き例は澤山ある。尙ほ字音の方ではイ＝キの尾音を有するものは阿段と宇段とであるが、國音では形容詞の方に　カシコイ、オソイ、ヒドイ、オモイ、クロイ等の如く於段に屬するものもある。是等も矢張り宇段と同じ筆法を應用することが出來る。

第二節　キの尾音を伴ふ字音の略字法

キの尾音を伴ふ字音は

シキ　ヂキ　リキ　ヰキ

の如き伊段を頭音とするものと、それから

エキ　ゲキ　セキ　テキ　ヘキ　レキ

の如き衣段を頭音とするものと二段に跨つて居る。

そこで先づ伊段を頭音とするもの、即ち

シキ　ヂキ　リキ　ヰキ

の尾音省略法に付ては、是亦尾音のキの字を全然省略し、且つ之に代るべき何等の記號をも添加

することなく唯其の頭文字を逆記すれば宜いのである例へば

シキ

と云ふ字音ならば、複畫式ではシの字はサの父字の尾端にイの母音符を結合せしめるのであるが其の尾端を廢めてサの字の頭端に結合せしめるのである。詰り唯シの字を逆さに書いたのみでシキの略字と約束するのである。それだけで宜い、

ヂキ　リヰ

も亦同じである。唯最後の

ヰキ

は逆記法と云ふ譯に行かないから、是はイの字の尾端を內側へ小さく圓を結んで置く。

それから

エキ　ゲキ　セキ　テキ　ヘキ　レキ

等の衣段を頭音としてキの尾音を有するものは、總てキの字は全然省略をして、其の頭音字の尾端。即ち母音符エの尾端を內側に向つて戻るべき分を戻らずして唯小圓を結び付けて其の略字とする。

但し此衣段を頭音としてキの尾音を有する字音が、他の字音の下に附いて熟語を成す場合には、全然キの文字なり記號は省略することが出來る、それは第七章に於て說明することにする。

第三節　クとツの尾音を伴ふ字音の略字法

最後に殘る所の問題はクとツの尾音を伴ふ字音尾の略字法を如何に取扱ふべきかである。

クの尾音を伴ふ字音は、前章に於て詳述した通り三十六種の多きに達し、ツの尾音を伴ふ字音も稍〻匹敵して三十三種の多きを占めて居る、故に之等の種類が多ければ多い程それだけ此略字法の制定は其の效用が廣く且つ大なるものである。

然らば此クとツの尾音を伴ふ字音略字法は之を如何に制定すべきか、

クとツの尾音略字は、之を共通として同一略符號を制定して頭音字に接續する。

而して其のクとツの尾音は速記文字のウの字を以て表すこととする。

是亦第七章以下の熟語の尾音省略法に據ると、多くの場合斯の如き略記號をも省略することが出來る。省略することの出來ないものに對しては此ウの字を以てクとツの略記號とする。

第五章　熟語と速記文字との關係

茲に謂ふ熟語とは、クサキ（草木）とか、ハルカゼ（春風）と云ふ國音の熟語ではなくして、ソウモク（草木）シユンプウ（春風）の如く、二字以上の漢字音が結合して成るところの熟語の方を指して謂ふのである。

熟語の音の組立、此の熟語の略字法則を考へる時には、先づ其の熟語が如何なる字音の組立から成つて居るかを明かにして置かなければならぬ。

字音は之を普通速記文字で書き現すと、唯單に一音一字のもの＝濁音及び單なる拗音をも含めて＝と、撥音、長音の如き二音であつても一字で書き現すことの出來るものと、それから二音はどうしても二字で書き現さなければならぬものとの三種類に分つことが出來る。

是等の三種類のものが互に後になり、先になりして結び付いて所謂熟語なるものを構成して居るのである。

それ等を分類的に列擧して見ると

1　一音と一音のもの　　意思　一　夏期

2　一音と長音のもの　苦勞　思想
3　一音と撥音のもの　河川　饑饉
4　長音と一音のもの　兵士　數字
5　長音と長音のもの　輕重　勞働
6　長音と撥音のもの　答申　精選
7　撥音と一音のもの　簡易　看過
8　撥音と長音のもの　信仰　健康
9　撥音と撥音のもの　謹慎　云々

まだ外にもあるが、兎に角以上の九つは、其の例題として上の段に掲げたものは、何か特定の略字でもあれば兎も角、さもなければどうしても速記文字では其のまゝ二字で書くより仕方のないものである。けれども下の段に掲げてある例題の如きものは、其のまゝ二字で書かなくても五十音圖の同行縮字法なり、同列縮字法なり、或は撥音縮字法なり、連濁、連撥縮字法なりがあつて幾分か其の書き方を省略することの出來るものである。是等も固より熟語略字法の一種である。けれどもそれは既に一般略字法として解決せられて居るものであるから此所には省略すると

して、然らば熟語略字法として研究を要すべきものは此の外にどんな種類のものがあるかと云ふと、

10　一音と二音のもの　可決　／
11　二音と一音のもの　決意　速記
12　二音と二音のもの　督促　鐵則
13　二音と長音のもの　特長　學校
14　二音と撥音のもの　脚本　切諫
15　長音と二音のもの　調節　／
16　撥音と二音のもの　煥發　／

以上10より16までは、速記の基本文字で普通に之を書き現さうとすると、下の段の促音は既に速記法に於ては略字化されて居るので、縱し四音であつても或るものは二字なり三字で書くことが出來るが、其の他は總て三字なり四字で書かなければならないものである。

第六章　促音の本體は何か

そこで此の種の熟語の略字法及び省略法の制定の研究をせんとするには、其の前提として先づ最初に熟語中に於ける促音は如何なる字音と字音との結合接觸から成るものであるか、其の本體を明かにして置く必要がある。

第一節　促音を構成する二條件

熟語中に於ける促音は左の二條件が具備しなければ決して成立するものではない。

第一條件　前字の尾音に**キクツ**の三音中何れかの存在すること。

的確（**テキカク**）學校（**ガクコウ**）結節（**ケツセツ**）

等の如く前字の尾音が必ず

キ　ク　ツ

の三音中の何れかであることを必要條件とする。若し前字の尾音が**キクツ**以外の**イ**＝**ヰ**の如き、若くは**ン**の撥音の如き、又は**ウ**＝**フ**の如き長音となるものでは促音は構成するものではない。

但し茲に唯二つの例外のあることを認めなければならぬ、それは

合切　合作　合式　合宿　合唱　合掌　合奏　合斐　合體　合點　合致　合羽　合併

合壁　合本　合衆

等の如く、又

早速　早急

等の如く**ガフ**（合）なり、**サウ**（早）なりが**ガツ**、**サツ**と轉訛されて促音を構成することになつて居る、以上の二つだけが促音構成第一條件の例外である。

第二條件　後字の頭音が加佐多波の四行音に限る

促音構成の第二條件としては、

後續字音の頭音加行のもの

國家（**カ**）　漆器（**キ**）　節句（**ク**）　滑稽（**ケイ**）

結婚（**コン**）　結核（**カク**）　一掬（**キク**）　發掘（**クツ**）

鐵血（**ケツ**）　各國（**コク**）　隻脚（**キャク**）　積極（**キョク**）

後續字音の頭音佐行のもの

切瑳（**サ**）　骨子（**シ**）　冊數（**スウ**）　達成（**セイ**）

質素（**ソ**）　活殺（**サツ**）　一色（**シキ**）　缺席（**セキ**）

拙速（ソク）　一尺（シャク）　接觸（ショク）

後續字音の頭音多行のもの

叱咤（タ）　一致（チ）　壓痛（ツウ）　缺點（テン）

屹度（ト）　屈託（タク）　一徹（テツ）　說得（トク）

結着（チャク）　率直（チョク）

後續字音の頭音波行のもの

一派（パ）　櫛比（ビ）　一夫（ブ）　出兵（ペイ）

潤步（ポ）　壓迫（パク）　鐵筆（ピツ）　切腹（フク）

潔癖（ペキ）　說法（ポウ）　一百（ピャク）

等の如く後續字音の頭音が、加行、佐行、多行、波行音何れかでなければ、如何に第一條件が具備して居つても促音は構成するものではない、以上の四行音が前字の尾音キクツの何れかと接觸結合して其の中の或るものが促音を構成することになる、是が促音構成の第二條件である。

促音構成の條二條件は加佐多波の四行音で、詰り濁音に變化する音のみであることを知らなければならぬ。而もそれが濁音であつては促音にはならない。

要するに促音は、前字の尾音がイ—キであり、若くは長音なり撥音であつた場合と。後續字音の頭音が加佐多波の四行音を除いた他の阿行、奈行、波行、（巴行に變化せざるもの）麻行、也行、良行、和行であつた場合には、如何に前字が促音構成の條件を備へて居つても絶對に促音は成り立たない。又其の外に第一條件が備つて居つても、後續字音の頭音が、濁音であつた場合も亦促音は成り立たないことは前に言つた通りである。

第二節　促音と半濁音との關係

促音を構成する第二條件中の波行音が促音となる時には、其のハヒフヘホなる清音が總て半濁音と稱せられる所のパピプペポに轉訛される。例へば

アツハク（壓迫）アツパク　テツヒツ（鐵筆）テツピツ

セツフク（切腹）セツプク　ケツヘキ（潔癖）ケツペキ

テツハウ（鐵砲）テツポー

等の如きものである。

此の半濁音と呼ばれるパピプペポなる音は、外來語は別として、國語としては獨立した音では

ない、總て今例に擧げたやうに、元來淸音であるべきものが促音となつた場合にパピプペポと轉訛されるものである。

尙ほそれともう一つは、促音ばかりでなく

クヮンハク（關白）クヮンパク　　エンヒツ（鉛筆）エンピツ
カンフク（感服）カンプク　　コンヘキ（紺碧）コンペキ
コンホン（根本）コンポン

等の如く、前字が撥音であつた場合にも其の後字のハヒフヘホが轉訛されてパピプペポとなる。

此のパピプペポなる半濁音は、速記文字としては純粹の波行音（淸音）とは全く別箇のものとして獨立して居るのであるから、以下說明の便宜上半濁音のことを巴行音と呼び、純粹の波行音と區別をすることにする。故に唯單に波行音と言へば巴行音は含まざるものと承知せられたい。

第七章　一般熟語尾音省略法

以上を以て熟語とは如何なる字音と字音の結合から成り立つて居るものであるか、さうして其の熟語と速記文字との關係を明かにし、且つ熟語略字制定研究上密接なる關係にある促音とは如何なる字音と字音の結合に依つて構成せられるのであるか、其の本體を明かにすることが出來た。

故に是より進んで愈〻熟語の略字法則の研究に入るべきの順序となつて來た。

熟語略字法とは言ふものの、實は矢張り其熟語の有する字音尾の省略法であつて、唯單なる字音の略字でなく、全く熟語としての字音尾省略法のことである。而も其の字音尾も結局問題として殘された所の唯キクツの三音を如何にして省略するかの研究に到着した譯である。

即ち熟語として前字なり、若くは後續字音（略して後字と謂ふ）なりにキクツの尾音の何れかゝあつた場合、其の前後の頭音字のみを書いて、其の尾音字のキクツ、それに代るべき何等の記號をも添加することなく、全然省略することが出來るかを研究するのが即ち此の熟語略字法の眼目である。

第一節　撥音と二音とよりなる熟語

熟語の中には

藻籍　間接　觀察　奸策

等の如く、前字が撥音であつて、後字が二音から成つて居るものがある。前字は撥音であるから

略字上何等考慮する必要はないが。後字が二音であつて、其の尾音が**キクツ**の何れかである場合に、如何にすれば其の**キクツ**の尾音字を全然省略して、而も明瞭に**キクツ**の尾音の何れかゞ存在するものとして、完全に之を能く讀破することが出來得るであらうか。

結り無から有を生ずるやうな此の難問題を解決するには唯一つの途が殘されてゐる。それは何であるかと云ふと、此の熟語中に於ける促音との關係を考慮すれば宜い、前に促音の本體を明かにして置いたのは實は此の熟語略字法研究の前提であつた。

前字の尾音が**キクツ**以外の場合には、如何に後字の字音が促音となるべき條件を備へて居つても促音は絶對に構成しないことは前述の通りであつて、即ち今問題になつて居る前字が撥音であつた場合には促音は絶對に構成しないことは明かな事實である。

斯の如く促音を構成しないと云ふ的確な事實を捉へ來つて巧みに之を利用すれば宜いではないか。然らばそれはどうするかと云へば、例へば茲に

漢籍——**艦籍**

と云ふのを書き現さうとするには

カン×セ —— **カンセキ**◎　（×は交叉の記號即ち促音記號）

の如く**カン**の字に促音法と同じく**セ**の字を一字交叉すれば宜いのである。**キ**は全然省略する。**カン**に**セ**を交叉しても絶對に促音は成立しないのであるから促音的に讀んで見ようとしても何とも讀み得られないではないか。即ち今日までの速記法上に於て絶對に交叉すべからざるものに敢て交叉することに依つて、そこに本來の促音と何等紛更を來すものではない。故に斯の如く交叉せられてあることに依つて、他に何等讀みやうもないのであるから、是は當然其の後字の**セ**の字の後に尾音としての**キ**の音が必ず伏在するものなることを此の方式に於て堅く約束して置けばそれで目的を達する譯である。次に

間接——**官設**——**關節**

に付ても同じことである。

カン×セ——**カンセツ**◎

前の**カンセキ**◎と何等異る所はない、**カン**に只**セ**を交叉しただけでそれが即ち**カンセツ**◎ともなる。詰り**カンセキ**も**カンセツ**も同じである。

そこで忽ち問題になるのは、漢籍も間接も速記文字では同じだとすれば、其の**セキ**と**セツ**の區

別はどうして判別することが出來るかと云ふことになる。

それは何も譯のないことである。それを判別するには唯速記學的常識に訴へれば快刀亂麻、直ちに解決するのである。例へば茲に前後に何等の文章もなく、又何等暗示を與へる何ものもない時に、唯漢然と**カキ**と書いてあつたのでは、柿か垣か、牡蠣か、夏期か、蓙器か何か分からない如く、唯單獨に速記文字で**カ゛×キ**と書かれてあつたゞけでは、其の隱されてある尾音は確に**キ**か**ツ**より外にないのであるから、**カンセキ**か**カンセツ**の中の何れかであることは當然決つて居るけれども、それが何を意味するものであるかは何人と雖も分からう筈はない、けれども速記に於ては、其の書かれてある**カ゛×キ**なら**カ゛×キ**の前後には必ず何等かの文言がなければならない筈である。さうすればそれは當然**カンセキ**か又は**カンセツ**の二つより外に讀みやうがないのであるから、**漢籍**、**艦籍**であるか、又は**關節**、**間接**、**官設**の何れかであることは、速記常識に於て其の間自から劃然として判別されなければならない筈である。けれども若し萬一にもそれは當然**艦籍**と讀まなければならないものを誤つて**カンセツ**と讀んだとする。又當然**關節**と讀まなければならない時に**カンセキ**と讀んだと假定する、勿論文章を成さぬのであるから文意の通じやう筈はない、必ず何のことか譯の分からないことになる、其の時には直ちに**カンセツ**を**カンセキ**、若くは**カンセキ**を**カンセツ**と**キ**と**ツ**を置き換へて讀み換へて見れば、其所に自から**艦籍**なら**艦籍**、**關節**なら**關節**と、求むる所の熟語は何等滯なく立どころに見出される譯である。

以上は單に**セキ**と**セツ**の變化に付てのみ述べたのであるが、要するに其の交叉せられたる後字の頭音が**エケセテネヘメレ**の衣段に屬するものであつたならば、其の省略されたる尾音は必ず**キ**か**ツ**の二つより外に何ものもないのであるから、

キにあらざればツ、ツにあらざればキ

と云ふ此の一つの對句を會得することが出來たならば此の間の問題を解決することは誠に易々たるものである。

以上は主として後字の頭音が、**エケセテネヘメレ**即ち衣段に屬するもののみに付て其の尾音の**キツ**の省略法を說明したのであるが、尙ほ衣段の外に

アゞ×ヰ＝**暈殘**　（後字の頭音**ヰ**段）
イゞ×ゞ＝**陵墓**　（〃　**イ**段）
ハゞ×ブ＝**反覆**　（〃　**ハ**段）
メゞ×ジョ＝**免職**　（〃　**メ**段）

等の如く、後字の頭音が衣段を除いた即ち阿伊宇於の各四段に亙つて存在して居るものも相當に數が多い。是等は前の衣段のものと異なる點は、最後の尾音がクとツであつて、既決のリキ即ち眼力、人力、眼識等仲段のものを除いたならばキの尾音は絶對に伴はない、是が衣段を除いた他の各段を頭音とする字音の特異の點である。それを反對に言ふと、衣段を頭音とするものには、其の尾音はクを絶對に有しないと云ふことが衣段の特異の點であるとも言へる。

そこで又問題となるのは、今例に擧げたやうな、例へばカン×キならば、サの尾音はクとツと變化してもアンサクなんと云ふ熟語はないから、是は當然暗殺か按察でなければならぬ、其の他の例も皆同じであるが、斯の如く其の熟語の尾音がクかツの何れかに偏在して居るものは誠に都合が好いが、

カン×サ＝奸策、間作

カン×キ＝諸説、辭表、暗殺

等の如く、其の尾音がクとツに跨つて存在して居る場合が屢〻ある。是等も亦速記常識に訴へるならば、其の前後の關係に於て容易に判別することが出來る筈であるが、若し奸策と讀むべきをカンサツと讀み誤つたとか、觀察と讀むべきを誤つてカンサクと讀んだとすれば文意が通じないことに氣が付くのであるから、其の場合に直ちにツをクと讀み換へるとか、クをツに讀み換へるならば、其の間自から釋然たるものがあらう。要するに後字の頭音が衣段以外のものであつたならば其の尾音は總て

クにあらざればツ　ツにあらざればク

であるから、此の對句を常に暗んじて居るならば、此のクとツの區別は何の苦もなく容易に判別することが出來る。

クにあらざればツ、ツにあらざればク（衣段を除く各段）

キにあらざればツ、ツにあらざればキ（衣段に限る）

此二大原則は熟語略字篇全體を通じて絶對に動かすべからざる鐵則であるから、此の場合特に高調力説して注意を喚起して置く次第である。

例　題

一、後字の頭音衣段なるが故に其の尾音は必ず

（イ）キにあらざればツ、ツにあらざればキに屬するもの

後字の尾音概ねキに限局してツに變化せざるもの

陰歴　瘟疫　演繹　完璧　癇癖　釁隙　岸壁　軍役　現役　劍戟　涓滴　紺碧　殘敵
純益　順適　巡歴　進擊　人跡　寸隙　損益　膽胆　耽溺　年歴　擯斥　奮擊　分折
便益　本籍　盆石　面壁　臨席

（ロ）後字の尾音概ねツに限局してキに變化せざるもの

暗熱　蘊結　炎熱　溫血　音節　簡閲　簡潔　完結　間歇　冠絶　貫徹　衆熱　鑑別
禁闕　弦月　限月　幻滅　混血　根絶　三傑　浚傑　純潔　俊傑　心血　人傑　心熱
陳列　寸節　鮮血　先決　先月　前月　潜熱　餞別　賤劣　團結　斷絶　段別　斷滅
轉結　電熱　殄滅　點滅　南越　軟鐵　人別　年月　判決　判別　貧血　泯滅　分蘖
分裂　變節　辯舌　辨別　本月　滿悅　滿月　臨月　連月　廉潔　錬鐵

（ハ）後字の尾音キとツとありて紛らはしきもの

姻戚　隕石＝引接。演劇　掩擊＝烟月　偃月。間隙　觀劇　感激＝衆月。艦籍　罐石
勘石　漢籍＝間接　官設　嵌接　關節　款接　環節。還暦　官歴＝寒烈　環列。禁掖＝
欣悅。金石＝緊切　近接。金的＝金鐵。檢疫＝檢閲。譴責＝建設。言責　原籍＝言設。
痕跡　今夕　今席＝懇切。三易＝三越。慘劇＝山月。山積＝山雪。三滴＝鑽鐵。算暦＝

參列。進擊＝新月。津驛＝親閲　信越。臣籍　親戚＝深切　親切　臣節。神敵＝沁徹。
新暦＝深裂。戰役＝潜越。戰跡　船籍＝潜竊。前席＝前說。洗滌＝先晳　銑鐵。旦夕
痰咳＝短折。點滴＝轉轍。典籍　轉籍＝點綴。何隻＝何節。反擊　繁劇＝半月。藩籍＝
半折。民籍＝民設。免疫＝面謁。面積　面責＝面接。門跡＝悶絶。連夕　憐惜＝連接
廉節。

二、後字の頭音衣段以外なるが故に其尾音は必ずクあらざればツ、ツにあらざればクに屬するもの

（イ）後字の尾音概ねクに限局してツに變化せざるもの

暗弱　鞍褥　安息　安德　安著　安直　暗默　暗躍　安樂　隱惡　韻學　韻脚　陰極
飲食　姻族　隱宅　隱德　隱匿　印肉　隱伏　隱約　淫樂　引力　婉曲　遠國　圓熟
艶色　圓卓　延着　鉛直　鉛毒　燕麥　鉛白　艶福　煙幕　宴樂　延略　音樂　音曲
恩澤　恩德　音讀　恩借　音譯　溫浴　恩祿　奸惡　官學　勸學　漢學　閑却　韓國
監獄　痼疾　官職　間色　間食　感觸　顏色　觀測　奸族　漢族　干柘　官宅　含著
監督　感得　眼肉　乾肉　感服　簡約　漢約　酣樂　乾酪　陷落　眼力　貫祿　官祿

金閣　金額　琴曲　金玉　近國　禁足　緊束　金屬　金色　銀色　菌毒　筋肉　金箔
緊縛　筋膜　金脈　欣躍　禁慾　金祿　金力　筋力　訓育　軍學　軍樂　君國　軍國
軍縮　勳爵　軍職　君側　軍屬　群俗　君德　訓讀　燻肉　軍服　軍略　檢覈　縣隔
幻覺　嚴格　見學　現額　減額　建國　顯爵　嚴肅　顯職　兼職　現職　減色　原色
檢束　舷側　原則　還俗　建築　賢德　謙德　建白　元服　硯北　劍幕　儉約　兼役
權力　元祿　眩惑　困却　坤極　混作　今昔　混食　紺色　混濁　黐篤　蒟蒻　魂魄
婚約　混浴　三惡　三角　三脚　三極　三曲　殘酷　參酌　蠶食　三食　塵芥　山賊
參著　三德　三毒　山腹　三伏　三木　山脈　三役　贊襲　慘落　三略　山麓　三惑
峻岳　順逆　殉國　春色　潤色　駿足　準則　俊德　順德　純白　淳朴　神格　人格
神學　心學　新曲　掛酌　神宿　神色　寢食　神職　侵蝕　親屬　親族　新築　人畜
神德　慎獨　仁德　人德　心腹　親睦　陣幕　人目　新譯　新約　神約　新藥　深綠
心力　盡力　甚六　寸尺　寸白　善惡　先學　淺學　禪學　全額　船脚　先客　戰局
全局　全國　前刻　淺酌　纖弱　前借　染色　染織　洗足　專屬　喘息　先著　宣德
占德　鮮肉　潛伏　船腹　全幅　前略　全力　撰錄　煽惑　遜色　存續　忖度　損得

村落　短角　單獨　暖國　探索　短縮　男爵　單色　男色　單獨　端直　淡白　毀落
膽力　彈力　珍客　沈着　鴆毒　沈默　賃借　田樂　電極　天國　典獄　添削　天爵
轉宿　天職　轉職　纏足　天則　塡塞　轉宅　天德　轉覆　天目　典藥　頽落　殄戮
電力　鈍角　貪食　頓著　豚肉　頓服　敦朴　貪慾　南學　軟弱　難色　何燭　何足
南北　何日　何脚　南極　難局　何尺　何著　何百　任國　人足　認諾　仁德　忍德
忍辱　人肉　年額　粘力　半額　藩學　晩學　叛逆　半玉　萬國　半作　犯則　藩賊
判讀　反覆　反目　反譯　晩酌　繁殖　伴食　品格　貧客　貧國　敏速　品目　分局
粉錯　分釋　紛飾　文飾　文德　文墨　文脈　分脈　變革　返却　變色　變則　邊幅
瓣膜　變約　本格　叛逆　飜刻　本國　本職　本則　風俗　本宅　本腹　飜譯　滿作
萬策　滿足　瞞着　滿腹　慢幕　滿目　明藥　明國　民俗　民族　民約　民力　面目
面縛　綿服　免職　文覺　紋服　悶着　爛額　亂國　濫作　爛熟　輪郭　隣國　吝嗇
淋毒　林木　贊歎　連借　連雀　戀著　廉直　連服　煉藥　連絡

（ロ）後字の尾音概ねツに限局してクに變化せざるもの

安逸　按察　暗殺　暗室　庵室　隱逸　隱欝　印刷　隱濕　引率　隱密　運筆　堙滅

演出　鉛筆　溫室　隱密　音律　嚴肅　深肅　人骨　進發　神罰　宸筆　眞筆　神佛
人物　陣歿　親密　辛辣　潛肅　先日　前日　船室　選出　戰術　前述　選拔　殲滅
全滅　戰慄　乾濕　乾漆　眼疾　元日　簡拔　間伐　乾物　灌佛　玩物　頑物　官立
禁壓　緊密　禁物　軍卒　軍閥　軍律　檢出　堅實　現實　劍術　幻術　嚴罰　健筆
見物　現物　嚴密　縣立　嚴律　嚴烈　混雜　散逸　三月　殘殺　蠶室　產出　產室
算筆　產物　三密　巡察　旬日　潤筆　準律　損失　村立　彈壓　單一　斷髮　彈發
斷末　鎭壓　珍物　沈沒　電壓　展閱　傳達　天罰　典物　殄滅　點滅　鈍物　南越
難詰　念佛　煩雜　萬物　班列　敏活　憫察　品質　紛骨　紛雜　紛失　舊發　文筆
文物　分別　粉末　變壓　偏屈　鞭韃　偏物　奔逸　本質　本末　漫筆　綿密　面詰
門札　門閥　亂雜　濫出　濫設　濫伐　濫發　隣室　倫沒　林立　練達　聯立

（八）後字の尾音クとツとあつて紛らはしきもの

晤黑＝鞍骨。遠隔　沿革＝圓滑。鉛醋＝圓札。感覺　間隔　扞格＝管轄。觀菊＝柑橘。
韓國　塞國　勸告＝換骨　顴骨　脘骨。奸策　間作＝觀察　鑑察　鑑札。贋作＝贋札。
塞竹＝卷帙。闕白＝早魃。灌木＝官沒　陷沒。金穀＝筋骨。金策＝金札。緊縮＝琴瑟。
險惡＝檢壓。元惡＝滅壓。嚴酷　原告＝拳骨。檢索　建策　獻策＝賢察　檢察。嚴肅＝
現出　言質。昏黑＝跟骨。山嶽　產額＝三月。散策＝三冊。三泊＝散髮　三發。三陸＝
纂立。深刻　申告　親告　神國＝心骨。潤澤＝順達。新作　振作＝診察。伸縮　振肅＝
進出　滲出　神速＝眞率。神託　新宅　信託＝進達　申達。瞑目＝進物。神戮＝震慄
新律　森立。宣告　先刻＝仙骨　薦骨。詮索＝美殺。宣託　選擇＝薦達。洗濯＝先達
蟬脫　占奪。船舶＝先發。占卜＝戰歿。天幕＝顚末。南國＝歇骨。半白　反駁＝反撥。
文格＝分割。辯駁＝辯髮。凡策＝梵刹。連作＝憐察。簾泊＝連發

第二節　長音と二音とよりなる熟語

字音で長音と云ふのは

オウ（應）**カフ**（甲）**シヤウ**（相）**リヨウ**（龍）

の如く、尾音に必ずウ或はフの音を伴ふものであるが、尙ほ速記學上では、前にも述べた通り

エイ（榮）　**ケイ**（慶）　**セイ**（勢）　**テイ**（定）　**ネイ**（寧）
ヘイ（兵）　**メイ**（命）　**レイ**（令）

等の衣段を頭音として、イの尾音を伴ふものは純粋の長音でなくても總て之を長音化して扱ふのを得策とするから、是等のものをも總稱して長音と呼ぶのである。

此の長音の尾音ウフイも亦促音構成の第一要素を缺いて居るから、是亦絶對に促音は構成しないことは明かである。

故に後字の尾音のキクツを省略し得ることは前の撥音の場合と同一である。即ち其の法則は

（一）後字の頭音衣段に屬するもの

ツウ×セ——諸切

ケイ×デ——擊笛

トウ×ヘ——蹤跡

（二）後字の頭音衣段以外の各段に屬するもの

ヒイ×ゾ——永續

ギュウ×ハ——紛紜

コウ×ヤ——公約

例題

一、後字の頭音衣段なるが故に其の尾音必ず

キにあらざればツ、ツにあらざればキに屬するもの

（イ）後字の尾音概ねキに限局してツに變化せざるもの

横笛　急激　舊歷　矯激　挾擊　强敵　胸壁　空擊　空隙　迎擊　警笛　刑辟　經歷

攻擊　行跡　業績　後壁　囚役　就役　收益　獄疫　襲擊　讎敵　衆敵　衝擊　衝激

增益　雙壁　嚮昔　長壁　丁役　定役　帝劇　當驛　道驛　盜癖　寶石　明歷　遊擊

邀擊

（ロ）後字の尾音概ねツに限局してキに變化せざるもの

英傑　急設　九穴　宮闕　凝結　强烈　行列　偶列　桂月　迎接　輕蔑　膏血　高傑

硬結　豪傑　口舌　高熱　口熱　紅熱　黄熱　鴻烈　功烈　終結　終決　秀傑　秋月

充血　猖獗　饒舌　生血　清潔　凄絶　贅說　壯絶　增設　送別　掃滅　勦滅　壯烈

葬列　中絶　忠烈　暢月　長舌　超絶　締結　提挈　蹄鐵　貞烈　低劣　當月　同列

氷結　剽窃　風穴　風說　風雪　平熱　並列　法說　鳳闕　崩壞　望月　某月　明月

明滅　要訣　流血　冷血　禮節　冷熱　陋劣

（八）後字の尾音キとツとあつて紛らはしきもの

往昔＝應接。休戚　舊跡＝急設　急切　舊說。仇敵＝丘垤。共益＝恐悅。行跡＝曉雪。
空席＝空說。經籍　螢石　硅石＝螢雪　經說　啓節。交易　公益＝校閲　甲越。功績
鑛石＝高說　巧拙　講說　高節　降雪。抗敵＝更迭　鋼鐵。降靡＝皇別。秋夕　囚籍
就籍　終席＝醜襲　執節　衆說。證跡　小石　硝石＝小說　詳說　小節。上席　定石
定席＝常設。成績＝淸節。正嫡　淸適　性的＝聖哲　襲鐵。西曆＝整列　淸冽。踪跡
僧籍　送籍＝創設　總說　霜雪　叢說　早雪。柱石　沖積＝忠節。懲役＝超越。朝夕＝
調節。朝敵＝澄徹。定積　定籍　帝威＝貞節　定說。撞擊＝同月。黨籍　悼惜　當席＝
當節　盜竊。同席＝同說。投擲＝透徹　紡績＝妄說　暴說。寶曆＝砲列。明哲　名籍＝
名說。嗚鏑＝明哲。有益＝優越。遊歷＝優劣。容積＝夭折。陽曆＝庸劣。

二、後字の頭音衣段以外なるが故に其の尾音必ず

クにあらざればツ、ツにあらざればクに屬するもの

（イ）後字の尾音概ねクに限局してツに變化せざるもの

舊惡　休學　給額　窮極　休職　休息　急速　吸著　牛肉　舊幕　舊約　窮厄　及落

牛酪　胸臆　驚愕　橋脚　鄕曲　强弱　怯弱　敎職　凶賊　供託　强直　脅迫　喬木
協約　享樂　協力　强力　空漠　空腹　經學　荊棘　慶祝　景色　繫屬　繼續　敬服
慶福　京洛　計略　强惡　高屋　剛臆　皇學　工學　光學　後學　合格　講釋　公職
贖職　交織　好色　皇族　豪族　肯諾　膠著　合著　鯁直　剛直　皇德　公德　鑛毒
購讀　降伏　口腹　剛腹　高木　坑木　公僕　鑛脈　公約　口約　膏藥　膏沃　攻落
後樂　攻略　住屋　收穫　修學　就學　終局　州國　執着　收縮　就職　修飾　秋色
重職　住職　終熄　從屬　修築　黙耆　視着　拾得　修得　重複　從僕　衆目　集約
重役　收錄　昇格　正覺　上格　城郭　乘客　償却　燒却　上客　消極　上告　小酌
昭尺　小食　常食　常職　裝束　小賊　上族　沼澤　妾宅　承諾　詔勅　消毒　松柏
承服　妾腹　慴伏　抄譯　硝藥　條約　情慾　上洛　商略　省略　常綠　賞祿　抄錄
少祿　數學　政局　靜寂　脆弱　生殖　聲色　請託　淸濁　成竹　簞竹　誠直　聖德
生肉　精白　征服　正副　制服　西北　簞卜　稅目　誓約　制約　性慾　政略　精力
勢力　贅六　總額　双脚　箏曲　相刻　造石　造作　裝飾　增殖　相續　宗族　增築
總督　草木　草藥　双翼　叢錄　通學　通告　通譯　底角　定額　停學　定刻　抵觸

定食　停職　定則　鼎足　定著　帝德　提督　獰惡　瞳若　當職　同職　盜賊　同族
到著　擅著　當直　同腹　同役　湯浴　胴慾　騰落　道樂　黨略　登錄　當惑　忠告
遣食　中毒　中肉　中腹　忠僕　注目　中略　聽覺　弔客　長策　吊索　朝食　長足
打擲　重複　鳥目　跳躍　凋落　張力　膿毒　腦膜　能力　風色　兵學　平曲　弊國
米國　米穀　弊宅　併託　米麥　平伏　兵厄　兵略　兵力　評釋　氷釋　病弱　縹色
病蓐　平仄　漂著　漂白　漂泊　標木　剽略　漂落　茅屋　方角　法學　忘却　暴虐
寶玉　報告　邦國　報國　亡國　奉職　飽食　暴食　望蜀　防蝕　法則　進著　方直
捧讀　冒瀆　豐肉　茫漠　暴落　方略　謀略　法力　明確　明德　明白　冥福　名木
瞑目　黙約　迷惑　名目　妄覺　毛族　盲目　毫碌　優角　遊郭　遊學　憂國　幽谷
有德　裕福　遊牧　遊樂　有力　勇躍　羊角　洋學　謠曲　陽極　容色　洋食　壅塞
遊食　有職　陽德　洋曰　洋服　羊膜　要約　瓔珞　要略　流落　稜角　兩脚　兩極
良策　兩足　領諾　良藥　兩目　禮樂　冷却　令色　厲色　令息　隷屬　令德　禮服
鑢木　鑢藥　零落　隔屋　樓閣　浪曲　牢獄　老弱　老職　爛熟　隨俗　隨宅　浪宅
朗讀　老木　老僕　籠絡　勞力

（ロ）後字の尾音概ねツに限局してクに變化せざるもの

休日　救恤　弓術　舊律　驕溢　强奪　偶發　藝術　警蹕　景物　高壓　高逸　皇室
硬質　膠質　膠漆　口實　口述　攻奪　强奪　好物　鑛物　毫末　公立　高率　柔滑
終日　充實　柔術　重罰　終末　週末　周密　消失　燒失　詳悉　情實　詳述　上術
上達　省筆　樞密　靜謐　生物　整物　精密　成立　稅率　巢窟　喪失　臟物　造物
通達　通徹　偵察　帝室　定日　鼎沸　鼎立　低率　定率　定律　貞烈　統一　同一
當局　登極　討索　當日　同質　同室　同日　討伐　盜伐　頭髮　同筆　動物　糖密
同列　誅伐　粥密　徵發　排發　徵罰　町立　調律　寧日　能筆　濃密　風骨　風疾
風物　風力　兵術　並列　表札　病室　描出　病歿　放逸　包括　方物　拋物　泡沫
法律　明達　名筆　名物　毛髮　右筆　尤物　陽物　擁立　龍骨　流出　流節　漏脫
明日　中日　抗日

（ハ）後字の尾音クとツとありて紛らはしきもの

奥蹟＝蹂殺。應諾＝横奪。吸角＝久濶。急告　救國＝朽骨。窮策　舊作＝糺察。舊宅＝
窮達。急迫　窮迫＝窮髮。凶惡＝强壓。俠客　胸膈　恐嚇＝恐喝。强國　俠骨　胸骨。
恐縮＝教室。教則　脇息＝强卒。蕎麥＝矜伐。空白＝空發。警告＝輕忽。計策＝警察。

形質＝慶祝。繫束＝輕率。惠澤＝啓達。輕薄＝啓發。繫縛＝刑罰。刑戮＝刑律。高閣
考覈　光角　口角＝狡猾　廣闊。公告　廣告　皇國　興國＝硬骨　恍惚。工作＝考察
絞殺。高足　高速　校則　梗塞　拘束＝降卒　工卒。光澤　皇澤＝公達　口達。黃白
厚薄　紅白　侯伯＝皓髮　黃髮。廣漠＝攻伐　功伐。項目　廣目＝貢物　公物。習熟＝
終日。充塞＝從卒。就縛＝秀拔。輯睦＝臭剝。小學＝正月。小國　生國＝掌骨。小策＝
笑殺　省察。消息＝將卒。頌德　稱德＝衝突。上白　上膊＝蒸發。條目＝上物。商陸＝
峭立。上陸＝繩律。正確　性格＝生活。正鵠＝整骨。政策＝生殺　制札。生縛＝征伐。
總角　騷客　綜覈＝總括。創作　搜索＝相殺。總則＝草卒　忽卒。藪澤＝送達。蒼白
糟粕＝總髮。碇泊＝剃髮。頭角＝統括。同格＝恫愒。島國　當國＝頭骨　撓骨。同作＝
洞察。黨則＝統率。東拓＝到達。統督＝唐突。籌策＝駐劄　誅殺。誅戮＝中立。彫刻＝
腸骨。彫琢＝暢達。調伏＝長物。農作＝惱殺。風伯＝風發。平角＝平滑。屏塞　閉塞＝
兵卒。幣帛＝併發。閉目＝幣物。暴惡＝防遏。方策　豐作＝芳札。謀策＝忙殺　謀殺。
豐熟＝砲術　法術。奉祝＝放出。放逐＝俸秩。磅礴＝砲發。抱腹　法服＝彷彿。法樂＝
放埒。名作＝明察。明白＝明發。良策＝諒察。鏤刻＝老骨。

茲に一つ注意を要すべきものがある。以上の如く尾音にクとツとあつて紛らはしいやうであるが、實際に於ては文章の前後の關係に於て、其の熟語としての性質が全然異なるのであるから容易に之を判別することが出來るが、唯以上の中　恐嚇と恐喝は殆ど其の意味が同じであるから、反讀の場合其の何れであつたか判定に苦しむであらう、眞に紛らはしきものは唯此の一つである。けれど幸にカクはカの字の水平線を二十度ばかり角度を上げたものを以てカクの略字とされて居るのが今日多いのであるから、それを活用すれば此の紛更は十分に避けることが出來る。

第三節　前字の尾音イ＝ヰと後字二音とより成る熟語

前字の尾音がイ＝ヰであつた場合、促音構成の第一條件が缺けて居るのであるから、是亦絕對に促音を構成するものではない。故に若し其の後字が二音であつた場合には其の尾音のキ　クツを省略し得ることは前の二節と何等異なる所はない。

但し前字の尾音イ＝ヰの省略されたる略字であつたならば、其の省略の效力は一層增大されることは勿論である。其の法則は

カイ×セ——會席。解說
ツキ×ラ——驛舍

前二節と同一手法である。

例　題

一、後字の頭音衣段なるが故に其の尾音必ず

キにあらざればツ、ツにあらざればキに屬するもの

（イ）後字の尾音概ねキに限局してツに變化せざるもの

快適　外敵　外的　海壁　外壁　再役　在役　罪責　罪跡　對敵　大敵　內壁　排擊
脾液　燧石　水石　追擊　追跡　瘰癧　磊石　來席　來歷

（ロ）後字の尾音概ねツに限局してキに變化せざるもの

愛悅　解決　怪傑　海月　劃切　解熱　採決　歲月　摧滅　碎裂　對決　大別　隊列
排列　水月　瑞雪　每月　來月　累月　猥褻

（ハ）後字の尾音キとツとありて紛らはしきもの

改易＝快悅。會席＝開設　怪說。改曆＝潰裂　開裂。碎石＝再說　細說。退役＝大悅。
退席　大石　堆積＝大切　大雪　大節。排斥＝排泄。累積＝縲絏。

二、後字の頭音衣段以外なるが故に其尾音必ず

クにあらざればツ、ツにあらざればクに屬するもの

（イ）後字の尾音概ねクに限局してツに變化せざるもの

愛國　愛息　愛讀　愛慾　愛樂　愛著　改惡　壞屋　海國　開國　廻國　戒告　介錯
解釋　海若　解職　會食　灰色　戒飭　會則　快速　海賊　概則　快諾　改築　會讀
害毒　該博　回復　開幕　皆目　解約　快樂　偕樂　概略　回祿　開闢　最惡　罪惡
才覺　在學　西國　菜色　菜食　彩色　才色　栽植　在職　催促　細則　採擇　再築
再讀　細脈　細目　材木　再約　災厄　才略　財力　戴錄　體育　退學　大學　退却
對客　大逆　大局　對局　大極　退窟　大國　大黑　對策　貸借　退職　大食　褪色
大賊　大德　體得　胎毒　大福　臺北　大木　代脈　胎膜　題目　大約　大役　大慾
大略　體力　大祿　內閣　內角　內國　內室　內實　內職　內則　內諾　內敕　內福
內幕　內約　內率　內力　敗屋　廢學　倍額　賣却　賣國　拜借　媒酌　賠食　配屬
廢嫡　悖德　敗德　拜讀　黴毒　拜復　拜伏　敗北　賣下　背約　賣藥　賣約　來客

來國　來著　來復　磊落　醉客　水脚　水玉　水國　衰弱　乖迹　水色　翠色　衰色
水澤水藥　追憶　推測　追白　推服追錄　墜落　羸弱

（ロ）後字の尾音概ねツに限局してクに變化せざるもの

挨拶　海拔　採掘　歲出　祭日　細筆　才筆　才物　財物　財閥　再發　細末　歲末
細密　推察　退窟　退出　對質　體質　體術　體罰　題筆　代筆　對物　大佛　內密
內達　腓骨　拜察　輩出　癈疾　排出　廢物　廢立　排律　埋沒　推察　水質　隨筆
堆漆　追奪　唯一　唯物　每日　類別

（ハ）後字の尾音クとツとありて紛らはしきもの

快革＝快濶。外郭＝概括。開拓＝恢達。外國＝骸骨。開鑿　改作＝改札　開札。灰白＝
閉發。海陸＝戒律　改律　介立。催迫＝再發。臺閣　體格＝大喝。對策　大作＝大冊
大刹。載白＝胎髮。癈宅＝配達。大陸＝對立。

第四節　前後共にキクツの尾音を有する熟語

前後共にキクツの何れかの尾音を伴ふ熟語中には、若しも後字の頭音が加佐多波の四行音中の何れかの音であつた場合には、其の中の或るものは

各國　拙速　密接

等の如く當然促音を構成するものであるけれども、必ずしも第一條件、第二條件が揃つて居るからとて其の悉くが促音となるものとは限つて居ない、促音とならないものも相當に數多くあるし、又縱し第二條件たる後字の頭音が加佐多波の四行音中であつても、それが濁音であつた場合には絕對に促音とはならない、例へば

セツソクは　拙速
セツゾクは　接續

と促音を構成するけれども、

の如く同じセツソクであつても、ソクがゾクと濁音の場合は促音とはならない。又後字の頭音が加佐多巴以外の行音であつたならば、促音としての第二條件が缺けて居るのであるから、是亦絕對に促音は構成しないことは、前に『促音の本體は何か』の章に於て明かにした通りである。

さう云ふ譯で前後共にキクツの何れかの尾音が伴つて居つても促音を構成しない熟語は數多くある筈である。

そこで是等の全然促音を構成しない熟語に對しては、矢張り前の三節同樣に尾音の**キクツ**を省略して、唯前後の頭音と頭音の文字のみの交叉に依つて尾音の存在するものなることを明かにすることも出來る筈である。例へば

節約＝**セ×ヤ**

と促音型を用ひても、それは後字の約の**ヤ**の音が全然促音の第二條件とは離れて居るのであるから、斯の如きは絶對に促音を構成しないことは明かである。又

約束＝**ヤ×ソ**

と書くならば、是は促音構成の第一條件、第二條件共に具備して居るから**ヤッソ**と云ふ促音は構成するけれども、**ヤッソ**と云ふ熟語はない、故に

セ×ヤ＝節約

ヤ×ソ＝約束

斯の如くにして之を尾音省略法として約束づけるならば成り立たぬことはない。けれども苟もそれが本然の促音と紛らはしいものがある以上は、促音の第二條件の有無に拘らず、斯の如き促音型の手法は避けた方が宜い。

然らば交叉法を避けてどうすれば宜いかと云へば、それには交叉法に似て非なる所の接觸法と云ふのがある。其の接觸法とは如何なる方法であるかと云ふと、例へば┼が交叉法であるならば、┼とか┼と云ふ風に接觸をさせて書くのが即ち接觸法である。

交叉法を×の記號を以て現すならば、接觸法は＋の記號を以て現すことにする。

此の特殊なる方法を採用することに依つて、運筆上の手數に於て交叉法と何等異なる所なく、而も促音と紛らはしいやうな關係もなく、唯頭音と頭音の文字の接觸に依つて完全に前後共に尾音**キクツ**を省略することが出來る。例へば

コ＋サは　國策

ヤ＋ソは　約束

セ＋ヤは　節約

であつて、斯の如く頭字と頭字の接觸は、必ず前後共に其の下に**キクツ**の尾音の何れかゞ伏在するものなることを明かにすることが出來る。

所で成る程右のやうな頭音と頭音の文字のみの接觸に依つて完全に前後の尾音を共に省略することは出來る。けれども之を反讀する場合に、前三節の如く前字が撥音であり、長音であり、若

くはカイ、サイ、タイ等の如くイ＝キの尾音の明かなるものは、其のまゝ讀めるから從つて後字の隱れたる尾音も明かに讀破することが出來るが、此の方では先づ最初の尾音がキクツの三種あつて、其の何れであるかさへ判明しないではないか、それが判明しなければ從つて後字の尾音も不明ではないかとの疑が起るであらう。

それは誠に尤もなる疑ではあるが、後に揭げる所の例題に依つて明かなるが如く、其の例題約二百九十例の中

一、前字の尾音キなるものは、其數僅に二十例に過ぎない、又

二、前字の尾音ツなるものは稍〻多くても三十五、六例に過ぎない。此內（衣段を頭音とするもの十五種、衣段以外のもの二十一種に過ぎぬ）

三、さうすると殘る所の二百數十例の此の多くのものは悉くクの尾音のみであることを强記しなければならない。

故に之を反讀する場合、最初の頭音が衣段でない限りは、大抵は其の尾音はクである筈である。クと讀んで其の意味の通じない場合は直ちにツと讀みかへれば宜い、所謂クにあらざればツであり、ツにあらざればクでなければならぬ。

若し最初の頭音が衣段であつた場合にはクなる尾音は絕對にない筈である、頭音が衣段の場合は、必ずキにあらざればツ、ツにあらざればキであるから、此の對句を忘れてはならない、此の對句さへ忘れなければキクツの尾音の何であるかは立ちどころに氷解することが出來る。

尙ほ茲に一つ注意して置かなければならぬことは、前字後字共にキクツの尾音を伴ふ熟語にして、若しも

國益　穀擊　國籍　告發　告白　極惡　國策　穀物　穀食　黑色　黑白　國辱　克服
極樂　國力　國立

等の如く、頭字がコクの場合、其のコクの略字として母字のオの字を以て代表字として居るやうな場合とか、或はセツの略字として母字のエの字を以て代表する場合があり、としたならば、わざわざコの字やセの字を書かなくてもオの字なりエの字を書いて前三節同樣交叉型を用ひるが宜い。

兎に角斯くすることに依つて、前後の尾音は共に之を省略することが出來るし、之を反讀する場合に先づ前字の尾音さへ讀破することが出來れば、後續字音のキクツの何れかであることは前の三節に於て明かにした如く立ちどころに其の熟語の何であるかは速記常識に於て明かにならなければならぬ筈である。

例題

一、前字の頭音衣段なるが故に其の尾音は必ずキにあらざればツ、ツにあらざればキに屬するもの

（イ）前字の尾音概ねキに限局してツに變化せざるもの

(1) 辟易　霹靂（以上後字の頭音も衣段で、其の尾音も亦必ずキであつてツとは讀めないもの）

(2) 激烈　激切　適切（以上後字の頭音衣段で、其の尾音ツであつてキとは讀めないもの）

(3) 易學　易簀　劇職　擊柝　劇毒　積惡　碩學　赤色　敵役＝敵藥＝適藥　摘錄　碧色（以上後字の頭音衣段以外のものであつて、其の尾音はクであつてツとは讀めないもの）

(4) 擊殺　昔日（以上後字の頭音衣段以外のものであつて、其の尾音はツであつてクとは讀めないもの）

（ロ）前字の尾音概ねツに限局してキに變化せざるもの

(1) 閱歷　血液（以上後字の頭音衣段で、其の尾音はキであつてツとは讀めないもの）

(2) 決裂　拙劣　絕滅　熱烈　滅裂（以上後字の頭音衣段で、其の尾音はツであつてキとは讀めないもの）

(3) 接續　血肉　血族　結膜＝血膜　血脈　結約　節約　劣惡（以上後字の頭音衣段以外のものであつて、其の尾音はクであつてツとは讀めないもの）

(4) 設立　切實（以上後字の頭音衣段以外のものであつて其の尾音ツであつてクとは讀めないもの）

右の中注意を要するものは昔日と切實である、若し切實と讀むべきを昔日と讀み、昔日と讀むべきを切實と讀むは全然意味を爲さぬ、其時は直に尾音のキとツを互に置換へて讀み直せば宜い。

二、前字の頭音衣段以外なるが故に其の尾音は必ずクにあらざればツ、ツにあらざればクに屬するもの

（イ）前字の尾音概ねクに限局してツに變化せざるもの

(1) 惡疫　惡癖　隔壁　學歷　國益　轂擊　國籍　足跡　側壁　蓄積　毒液　爆擊＝駁擊　博奕　白壁　服役　腹壁　木石　目的　目擊　玉石　逆擊　弱敵　宿驛　宿昔（以上後字の頭音衣段で、其の尾音はキであつてツとは讀めないもの）

(2) 格別　隔絕　曲折　國鐵　錯節　炸裂　熄滅　卓越　卓絕　卓設　特設　特別　毒舌　駁說　爆裂　覆滅　撲滅　客月　寂滅　灼熱　直接　略說（以上後字の頭音衣段で、其の尾音はツであつてキとは讀めないもの）

(3) 隔際＝隔月　客月。學籍＝學說。族籍＝俗說。白晳＝白雪。躊躇＝曲折。
宿敵＝叔姪。職責＝觸接。（以上後字の頭音衣段で其の尾音キとツと共存するものであるから、誤讀の場合キとツの置換を要するもの）

(4) 惡食　惡僕　畫策　變鑠　革職　學殖　學則　角逐　獲得　學德　學僕　隔膜
鶴翼　學力　極惡　國策　穀食　黑色　國辱　黑白　克服　極樂　國力　索莫
炸藥　策略　俗惡　俗學　促迫　束縛　速力　啄木　諾約　竹柵　竹帛　毒惡
德育　督學　獨學　督促　獨得　獨木　毒藥　獨樂　肉食　博學　莫逆　伯爵
白色　麥食　爆竹　薄德　白墨　爆藥　薄祿　伐木　馥郁　復職　福德　服毒
服藥　福祿　墨色　目測　默諾　木鐸　目錄　約束　陸續　戮力　肋膜　逆賊
脚力　曲尺　曲直　玉帛　曲目　極力　尺八　芍藥　雀躍　食卓　囑託　職服
屬目　燭力　宿惡　縮尺　淑德　熟讀　著色　著服　著目　著陸　敕額　直譯
百尺　百藥　脈博　脈絡　綠色　百燭（以上後字の頭音衣段以外のもので、其の尾音はクであつてツとは讀めないもの）

(5) 惡質　惡疾　畫一　確執　確實　學術　學閥　擱筆　確立　屹立　黑漆　穀物
國立　錯雜　昨日　作物　即日　速達　俗物　卓出　卓拔　毒殺　得失　特發
特筆　獨佛　毒物　獨立　特立　肉筆　駁雜　剝奪　白髮　爆發　博物　幕末
複雜　覆沒　朴訥　抑壓　落脫　略奪　客室　旭日　弱卒　植物　食物　熟察
祝日　熟達　著實　嫡出　直筆　直立　百出　略述（以上後字の頭音衣段以外のもので、其の尾音はツであつてクとは讀めないもの）

（ロ）前字の尾音概ねツに限局してクに變化せざるもの

(1) 乭櫟　活歷　實益　突擊（以上後字の頭音衣段にして、其の尾音はキであつてツとは讀めないもの）

(2) 日月（以上後字の頭音衣段にして、其の尾音はツであつてクと讀めないもの）

(3) 逸樂　活躍　活力　屈辱　骨肉　雜木　雜錄　實額　實力　脫俗　脫落　奪略
沒落　密約　出獄　筆墨（以上後字の頭音衣段以外のもので、其の尾音はクであつてツと讀めないもの）

(4) 出沒（前字の頭音衣段以外のもので其の尾音ツのものには、後字の頭音是亦衣段以外のものには其の尾音クとなるものはなし）

（ハ）前字の頭音衣段以外のもので其の尾音クとツの紛らはしきもの

白熱＝發熱。握力＝壓力。格物＝活物。

（ニ）後字の頭音衣段以外のもので其の尾音クとツの紛らはしきもの

告白＝告發。質朴＝出沒。一目＝一物。落魄＝落髮。

以上要するに、其の尾音はキクツの三樣あつても、其の頭音を衣段のものと、衣段にあらざる他の各段のものとを區別すれば、頭音衣段のものは其の尾音は必ずキにあらざればツ、ツにあらざればキであるから、之を讀破すること甚だ容易であるし、又頭音衣段以外のものであつては其の尾音はキなるものは絶對になくして、其の殆ど大部分はクであつて、ツの尾音を有するものは非常に少いのであるから、多くの場合先づクと讀んで、萬一意味が通じなければツと讀みかへれば立ちどころに解決する筈である。

第五節　前字はキクツの尾音で後字撥音、長音、イ＝ヰより成る熟語

是は丁度第一節、二節、三節と反對で後字の方が撥音なり長音、イ＝ヰの尾音のもので、前字の方にキクツの何れかの尾音の存在する熟語で、此前字の尾音を省略しようと云ふのである。

其の省略法は第四節と同じく接觸法によりてキクツを省略することが出來、又それを讀み返す場合に接觸せられてあることに依つて、キクツの何れかの尾音の存在を明かにすることが出來る、其の方式は

テ＋セイ＝＝適正
セ＋エウ＝＝切要
コ＋サイ＝＝國債
ト＋ゼン＝＝突然
コ＋スキ＝＝國粹

の如くであつて前節と同じであるから説明の要はなからうと思ふ。

例題

一、前字の頭音衣段なるが故に、其の尾音は必ずキにあらざればツ、ツにあらざればキに屬するもの

（イ）前字の尾音概ねキに限局してツに變化せざるもの

腋臭　突世　驛長　驛遞　驛田　激勵　石英　積戟　石材　石山　席順　脊椎　脊髓
尺寸　赤誠　石造　脊柱　石塔　脊背　石版　席料　寂寥　敵營　適應　敵軍　適合
適從　敵情　適性　敵前　敵對　敵彈　的中　適當　適任　適用（摘要）適例　碧水
僻在　碧潭　歷代　曆數　歷訪

（ロ）前字の尾音概ねツに限局してキに變化せざるもの

閲覧　血絲　血溫　決斷　結繩　結論　血稅　厥然　缺禮　月齡　設宴　絶緣　絶群
絶大　說明　絶命　切論　鐵案　鐵道　鐵瓶　鐵捧　鐵板　熱量　熱望　熱涙　別段
別宴　別院　滅亡　滅門　劣情

（ハ）前字の尾音キとツとあつて紛らはしきもの

積分＝節分。夕陽＝切要。赤山＝雪山。席上＝接壤。適材＝鐵材。敵壘＝鐵類。

二、前字の頭音衣段以外なるが故に、其の尾音は必ずクにあらざればツ、ツにあらざればクに屬するもの

（イ）前字の尾音概ねクに限局してツに變化せざるもの

惡才　惡水　惡心　惡性　學才　確信　學生　逆臣　逆心　逆襲　虐待　逆鱗　逆流
極端　極東、玉案　玉體　玉碎　國際　國債　國粹　國勢　國葬　國體　國中　國定
國道　國難　國賓　國風　國幣　國法　國本　國民　克明　國有　昨秋　昨春　昨年
昨晩　搾乳　作文　錯亂　釋明　借問　借財　借用　借入　酌量　肅清　祝電　宿醉
職員　職人　職制　食言　食膳　食傷　植民　束帶　息災　即賣　測量　屬僚　澤庵

澤山　託送　濁流　濁水　著信　著水　著想　嫡流　直前　直線　直答　勅裁　直面
筑前　畜生　畜類　特選　毒性　獨裁　得心　獨身　毒草　特長＝特徴　匿名　肉身
肉聲　博言　白菜　白山　白水　白人＝白刄　白扇　漠然　剝製　爆聲　爆笑　莫大
爆彈　博覽　舶來　幕僚　服罪　腹心　腹水　服制　服裝　腹痛　復讎　副將　副長
伏在　北東　北端　北滿　北洋　北朝　卜筮　目算　目送　木造　目前　目標　木精
木炭　木曜　百歲　百姓　百兩　白蓮　躍然　藥籠　藥劑　藥草　翼贊　慾心　沃饒
抑制　抑留　翌朝　洛外　洛東　落膽　落第　落掌　洛陽　落涙　樂遊　落雷　綠陰
綠青　綠水　惑星　惑亂

（ロ）前字の尾音概ねツに限局してクに變化せざるもの

割愛　割讓　豁然　屹然　喫煙　詰問　吉例　忽然　撮影　雜門　失念　失禮　實在
卒然、卒業　達人　脫營　秩然　凸凹　捺印　發案　發動　發賣　發明　必然　必要
佛領　佛壇　佛堂　物外　勃然　末代　末流　密雲　密令　密獵　滅亡　慄然　立案
黑煙＝忽焉。白毛＝發毛。

第六節　キクツの尾音を有するもの〻疊音より成る熟語

キクツの何れかの尾音を有する同一文字が二つ疊まれて語熟を構成して居るものに二種類ある。一つは

嚇々　切々

の如く促音を構成するものと、他の一つは

白々　默々

の如く促音とならないで、其の儘讀むものとある。

第一の促音を構成するもの〻省略法は、次の第八章に於ける同行音の熟語略字法則に讓つて、今茲には第二の如き同じ文字を二つ重ねて其の儘發音する熟語、其の數は固より多くはない。けれども其の數は少くても矢張り**キクツ**の尾音字を省略することが出來るならば、さうして又省略しても尙且明瞭に**キクツ**の伏在を知ることが出來るならば、宜しく其の省略法を講じて置くべきである。

それはどうすれば宜いかと云ふと、**キクツ**の尾音は全然之を省略して、唯頭音の文字のみ一字を書いて、それに從來多く用ひられて居つた古い型の疊音符〻の山形の記號を復活させて、此の記號を其の頭音の文字に向つて促音型の交叉法を應用する、即ち

テ×〻＝滴々
ベ×〻＝別々
ト×〻＝得々

例　題

一、頭音衣段なるが故に其の尾音は必ず
　キにあらざれば**ツ**、**ツ**にあらざれば**キ**に屬するもの
（イ）尾音概ね**キ**に限局して**ツ**に變化せざるもの
　驛々　寂々　滴々
（ロ）尾音概ね**ツ**に限局して**キ**に變化せざるもの
　別々
（ハ）尾音**キ**と**ツ**とあつて紛らはしきもの

歴々＝烈々

二、頭音衣段以外なるが故に其の尾音は必ず**ク**にあらざれば**ツ**、**ツ**にあらざれば**ク**に屬するもの

（イ）尾音概ね**ク**に限局して**ツ**に變化せざるもの

謂々　肅々　嘖々　續々　諾々　白々　漠々　默々　樂々　碌々　脈々　著々　綽々

寂々

（ロ）尾音概ね**ツ**に限局して**ク**に變化せざるもの

欝々　屹々　吃々　物々　勃々　密々

（ハ）尾音**ク**と**ツ**とあつて紛らはしきもの

福々＝沸々

第七節　促音の後字二音より成る熟語

促音は、元來前字の有する**キクツ**の尾音は速記法上當然省かれるものであるから、何等考慮する必要はないが、

發達　壓迫　筆蹟

等の如く、其の後字が**キクツ**の尾音を有する熟語であつた場合に、是亦其の**キクツ**の尾音を省略することが出來ないであらうか、若し省略しても何等他に衝突するものがない限りは、其の儘のものを採つて以て**キクツ**の尾音の存在するものとして略字化することは差支ない筈である。例へば

ハ×タ＝發達

の如く、促音としては**ハッタ**であるけれども、**ハッタ**と云ふ熟語は他にない、八田と云ふ人名なり地名のないことはないが、それは自から區別を明かにすることが出來るから、**ハッタ**と書かれたものは『發達』の略字だと約束づければ完全に所期の目的を達することが出來る。又『壓迫』でも同じことである、**アッパ**と書いて**ク**を省いても**アッパ**と云ふ熟語は他にないから**アッパ**は壓迫の略字であると約束づければ宜い。

例　題

一、後字の頭音衣段なるが故に其の尾音は必ず

キにあらざれば**ツ**、**ツ**にあらざれば**キ**に屬するもの

（イ）後字の尾音概ね**キ**に限局して**ツ**に變化せざるもの

齊積　潔癖　絶壁　鐵石　鐵壁　日夕　八隻　拔擢　筆蹟　匹敵　別席

（ロ）後字の尾音概ねツに限局してキに變化せざるもの

惡血　齊血　屈折　剔抉　熱血　碧血　密接

（ハ）後字の尾音キとツとあつて紛らはしきもの

一席＝一節。一滴＝一徹。關席＝結節。

二、後字の頭音衣段以外なるが故に其の尾音は必ずクにあらざればツ、ツにあらざればクに屬するもの

（イ）後字の尾音概ねクに限局してツに變化せざるもの

壓迫　壓服　一德　割腹　褐色　月蝕　掘鑿　屈託　屈曲　屈服　傑作　結束　結着

血色　潔白　作曲　雜駁　失脚　隻脚　積極　接觸　切腹　脫却　鐵則　納得　日蝕

發著　罰則　發足　逼塞　逼迫　物色　別格　別宅　北國　密告　密著　立脚　立食

立國　立腹　列國

（ロ）後字の尾音概ねツに限局してクに變化せざるもの

齊血　活撥　出發　接骨　鐵筆　突出　發掘　白骨　發達　別冊　抹殺

（ハ）後字の尾音クとツとあつて紛らはしきもの

壓搾＝壓殺。一策＝一冊。一泊＝一發。敵國＝鐵骨。復讐＝復活。失策＝出札。

此の外に

拙速　出席　實績　實說

等の如き前後の頭音が同行音のものもあるが、是等は次の第八章同行音の熟語略字法則に讓ることゝする。

兎に角以上のやうなものはキクツの尾音を省いても二音と一音のものゝ促音と紛更するやうなことはないから斯う云ふものはそれ〴〵の確定的の略字として採用すれば宜い

所が窒息と書くのを右の書法に據るとチッソと書くことになる。さうすると窒素と云ふ本來の促音の熟語と衝突をする、それでは所期の目的を達することが出來ない、故にさう云ふものは最後の尾音のクなりツを省くことは出來ないから、此場合には必ず尾音略字の（速記文字のウ）の字を添加しなければならぬ、例へば

一角は一家　一掬は一撲　一國は一箇　一室は一死　一尺は一瀉　一燭は一緒

一泊は一派　嚇々＝斯々は各科　各國は各個　各局は割據　結核は結果　結局は穴居

骨骸は國家　錯覺は作花　出血は出家　窒息は窒素　鐵柵は鐵鎖　發覺は發火
佛國は復古　別室は蔑視　密室は密使

等の如く、**キクツ**の尾音を除かうとすると、本來の促音熟語と衝突するから、どうしても尾音略字を添加しなければならないものである。

第八節　一音と二音、若くは二音と一音より成る熟語

刺戟　左翼　未決

等の如く前字一音、後字二音のもの

歴史　著手　說論

等の如く前字二音、後字一音から成る熟語は其の數甚だ多い、是等に對しても尾音の**キクツ**を省略する方法は對立法其の他種々考案をすれば出來ないことはない。

けれども速記文字**ウ**の字を以て**キクツ**の代表文字とすることが出來るならば、一々筆を離す不利を避けて代表略字を交ぜて其の儘連綴する方が宜からうと思ふ。

其の代表略字が**キクツ**の何れであるかは前節以上に於て餘りにも精しく說明をしてあるから茲には省くことにする。

以上を以て**キクツ**の尾音を省略する大體の法則を決定すことが出來た。

第八章　同行音の熟語略字法則

同行音の熟語略字法則と云ふのは、例へば

科外　喜劇　區劃　柑橘　皇國　些細　施設　數册　性質　相續

等の如く、前字後字共に其の頭音が五十音圖の加行音なら加行音、佐行音なら佐行音と云ふやうに同行音である熟語の場合に、後字の二音の字音に或る特定の略記號を定めて、其の熟語の書き方を省略しようと云ふのである。其の特定の略記號は僅に五種を以て足りる。

此の同行熟語略字法は、前章の一般熟語略字法則の足らざる所を補ふの妙を得たるものである。けれども中には前字が撥音であり、長音であり又は**イ**＝**キ**の尾音を有するもので後字が同行音である場合には省略法として違つた形に於て重複するものもある、それ等は何れを採用するも可なりである。

第一節　後字イの尾音を伴ふもの

イの尾音を伴ふ字音は、衣段を頭音として長音化する所の**エイ　ケイ　セイ**等の類のものを省くと、唯頭音阿段に屬するもの、即ち**アイ　カイ　サイ　タイ　ハイ　マイ　ライ　ワイ**の九つだけであることは、屢〻繰返して述べた通りであるが、此の同行熟語略字法に於ては、是等のものが例題の如く後字として同行音熟語となつた場合に、此の後續字音は總て共通に唯點の一點を以て其の略記號とすることを約束づけて置く。結り其の點一つは、前字の行の第一音即ち**アカサタナハマラワ**に同化して、それに**イ**の尾音を伴ふ字音となる。

例へば若しも茲に

カカイ　キカイ　クカイ　ケカイ　コカイ

と云ふのを書き現はさうとするには、其の**カキクケコ**の各〻の下に點一點を打つ。

前字が總て加行であるから、其の下に打たれた一つの點は、前字の加行音の第一音たる**カ**と同化して、**カイ**となつて、是等の熟語を表はすことになる。

ササイ　シサイ　スサイ　セサイ　ソサイ

と云ふ場合には、**サシスセソ**の各〻の下に點を一つ打つ。さうすると今度は前字が佐行音であるから、其の下に打たれた點は、佐行の第一音の**サ**に同化して、**サイ**となつて、是等の熟語を表はすことになる。

以上と同じ理窟に於て、前字が多行であつた場合は、其の下に打たれた點は總て**タイ**となり。前字が奈行音なれば其の下の點は**ナイ**となり。**ハイ　マイ　ライ　ワイ**總て同一理由に基いて點一點を以て表はすことが出來る。

それで先づ加行音の同行熟語の場合だけに付て、稍〻重複に亘るも、更に詳しく說明をすると、

【加行】　後字の點一點は**カイ**と讀むべきもの

河海・歌會。機械・器械・奇怪・氣海。區會。ケカイ(警戒)。コカイ(後悔)

と云ふやうなものを書き表はさうと云ふ場合には、前字の**カキクケコ**の字の下にそれ〴〵點一點を添加すれば宜い。換言すれば

カの字の下に點の打つてあるのは　**カカイ**

キの字の下　同上　**キカイ**

クの字の下　同上　　クカイ
ケの字の下　同上　　ケカイ
コの字の下　同上　　コカイ

と云ふことになるから、前後の文章の關係に於てそれ〴〵適當なる熟語を當嵌めれば宜い。

以上は唯前字後字共に清音の場合のみに付て說明をしたのであるが、若しも

瓦解・画會。議會。グカイ。下界。誤解・碁會。

等の如く、前字が濁音なれば勿論濁音の處理をしなければならぬことは勿論であるが、縱し前字は濁音であつても其の下の點は清音の**カイ**である。

官海・環海・勸戒。近海・欣懷・金塊。訓戒。見解・縣會。今回。

空海。警戒。公開・公海・航海・後悔。

等の如く、前字が撥音であつたり、長音であつた場合にはそれ相當の文字を當嵌めなければならぬことは勿論であるが、下の加點は同一である。

科外。感慨。氣慨。苦界。磬咳。圈外・懸崖・縣外。戶外。慷慨・港外・梗概・口外・校外・郊外。

等の如く、後字の字音が濁音であつた場合は、其の濁音記號として**カイ**の點に尙一點加へ、‥と二點を横に竝べて後字は濁音であることを示すことにする。それから又

言外　号外

の如く、前字後字共に濁音の場合は、‥と點を二つ縱に竝べて上下共連濁音なることを指示するのが宜からうと思ふ。又

學界　學會。奇ッ怪。決潰。國會。

等の如く促音の場合には、點の打ちどころを變へて交叉の意味に於て、前字の下に接觸して打つ、點が前字に接觸して居ることに依つて促音なることを意味するのである。尙もう一つの方法は**イ**の字を前字に交叉して、前字が促音であり且つ後字が**カイ**であることを約束するのも宜い。次に

休會。教會・協會。業界。境涯。魚介。

等の如く前字が拗音で**キャ　キュ　キョ**の場合は、之を加行音として取扱ふ、例示の如きを書き表はす場合には矢張り其の下に打たれた點は**カイ**と讀むべきである。尙ほ

開會　海外　外界

等の如く、前字の**カイ**の字が既に略字化されてある場合は勿論であるが、

閣外・格外。國外。局外。

等の如く、前字が三音の場合でも、其頭音が加行音ならば、其下に打たれた點は矢張りカイとなる譯である。

以上を以て同行音熟語の略字法としての加行の部の大體を說明し終つた譯であるが、佐行以下各行總て同一法則に據ること勿論であるから、唯例題のみを掲げて說明の煩を避けることゝする。

例題

【佐行】サイ ザイ　些細　散在・散財　仔細　私財・死罪　自裁　自在　震災　薪材　人材　社債　謝罪　主催　主材　秀才　俊才　書齋　詳細　所在　如才　淨財　數罪　世才　制裁　千載　製材　嗤嘲　蔬菜　總裁　村債　存在

【多行】タイ　墮胎　多大　團體　大體　遲滯　地代　賃貸　鎭臺　茶代　中隊　頂戴　着帶　勅題　停滯　帝大　天體　天臺　渡臺　登第・燈臺　當代　土臺　胴體

【奈行】ナイ　年內

【波行】ハイ　販賣　肥培　腐敗　分配　返盃　膨湃　朋輩

【麻行】マイ　蒙昧

【良行】ライ　落雷

第二節　後字の頭音阿段に屬するもの

本第二節以下各節の同行熟語略字法則は、後字の尾音キクツを有する字音を省略するのであるけれども、其略記號は阿伊宇衣於の各段毎に各〻異なる記號を制定することになる。

先づ後字の頭音阿段に屬するもの、即ちアカサタナハマヤラワを頭音として成る尾音は、アイ、アク、アツの如くイクツの三種であるが、イの尾音を有するもの、アイ、カイ、サイ等の如きものは前節に於て既に決定したのだから、殘る所のものはクとツの尾音を伴ふ字音だけである。

クとツの區別に付ては、前章一般熟語略字法則の場合に詳述した通り速記常識に依つて判別するのであつて、其の略記號は同一であつて、何等區別を要しない。

然らば前字が阿段であり、從つて又後字の頭音が阿段であつて、其の尾音にク　ツを伴ふ同行字音の熟語の場合の共通略記號としてはどうするかと云ふと、

速記文字のカの字の約三分の一の長さのもの（一）を以て之に充當するのである。

即ち其のカの字の三分の一の長さのものが、前字の頭音がカキクケコであつた場合には矢張り其

の加行の第一音の**カ**に同化して、それが**カク**ともなり**カツ**ともなる。又前字の頭音が**サシスセソ**であつた場合には其の佐行の第一音**サ**と同化して其の同じ記號が**サク**か**サツ**となる。**タク、タツ。ハク、ハツ。**以上皆同じ理由で變化して行くのである。さう云ふことを約束づけて置けば宜しい。

例へば

餌格＝**カ**＋（略記號の一）
祀察＝**ジ**＋（略記號の一）
邸宅＝**ディ**＋（略記號の一）
併設＝**ヘイ**＋（略記號の一）
懊惱＝**マン**＋（略記號の一）
要約＝**ヨー**＋（略記號の一）
拳法＝**レイ**＋（略記號の一）

等の如く、唯單に一つの略記號が前字に同化して**カク**＝**カツ**ともなり、**サク**＝**サツ**ともなり、**タク**＝**タツ**ともなるのである。

然らば其の書き方はどうするかと云ふと、其略記號を前字に接觸さす。—但し『**價格**』の如き接觸し難きものは、前字の**カ**の字の右下に**カク**の略記號を添加する。

以上で大體の說明を終つたから次に例題を掲げるのであるが、例題中＝＝としてあるのは即ち其尾音**ク**にあらざれば**ツ**、**ツ**にあらざれば**ク**に屬するものゝ中、**ク**と**ツ**を共有するものであつて、他は單に**ク**か**ツ**の何れかの一つを有するものである。•の印のあるものは同音異義の熟語を表はしたものである。

例　題

【加行】カク カツ　價格　價額•下駄　扞格•間隔•感覺＝管轄　畫學•雅樂　漢學　改革＝
快活　外郭＝概括　企畫•規格•其角＝餞餉　金閣　金額　銀閣　嗅覺＝久濶　給額•
休學　胸膈　俠客•恐嚇•脅嚇＝恐喝•凶黠（紛らはしきものは恐嚇と恐喝）畫劃
苦學　隅角　軍學•軍樂　計畫•圭角＝慧黠•契濶　經學•谿壑•鰲愕　懸隔•檢覈•
劍客＝喧聒　見學•研學　嚴格•幻覺　減額　結核　顧客•孤客＝枯渴　古學　互角•
語格　語學　高閣•口角＝狡猾•廣闊　皇學•工學•講學　合格　困學

【佐行】サク サツ　坐作　散策＝三冊　殘殺•斬殺　細作　試作•思索＝視察•刺殺　自作＝
自殺　振作•新作＝診察•審察　射殺　銃殺　小策＝詳察•笑殺　句朔＝巡察　失策＝

出札　水柵＝推察　寸札　製作・正朔・政策＝省察・生殺・制札　穿鑿・詮索＝羨殺
創作・捜索＝相殺　造作　尊札

【多行】タク　タツ　褫奪　彫琢・超卓＝暢達　調達・超脱　通達　邸宅　轉宅　傳達　東拓＝到達

【奈行】ナク　ナツ

【波行】ハク　ハツ　半白・反駁＝反撥　藩閥　韮薄　漂泊・表白・漂白　布帛・浮薄＝不發
不拔　風伯＝風發　幣帛＝併發　米麥　辯駁　磅礴＝暴發　方伯＝蓬髪・疱發

【麻行】マク　マツ　幔幕　明末

【也行】ヤク　勇躍　豫約　要約（副詞「漸ク」＝應用）

【良行】ラク　倫落　連絡　零落　籠絡

第三節　後字の頭音伊段に屬するもの

伊段即ち**イキシチニヒミリヰ**を頭音として成る字音は、其の尾音は**キクツ**の三種であるが、其の**キ**の尾音を伴ふ字音即ち　**ヂキ、ヒキ、リキ、ヰキ**に付ては既に字音略字として決定して居るし、又同行熟語もないのであるから此の場合考慮する必要はない。さうすると殘る所のものは是亦**ク**と**ツ**の尾音を伴ふ字音だけである。

そこで此の略記號は母音符の**ウ**（ー）の字を以て之に充當する。併し此の種の同行熟語は其の數誠に少いものである。

例　題

【加行】キク　キツ　寒菊＝柑橘

【佐行】シク　シツ　詐術・詐述　産出　算術　歳出　祭日　止宿・私淑＝支出　私塾　事實
伸縮＝進出　新宿＝眞實　仁術　車軸＝寫實　手術　收縮　習熟＝終日
消失

【多行】チク　チツ　貯蓄

【波行】ヒツ　馬匹

【麻行】ミツ　綿密

【良行】リク　リツ　亂立　離陸＝利率　林立　兩立　聯立

第四節　後字の頭音字段に屬するもの

宇段即ち**ウクスツヌフムユル**を頭音として成る字音は、其の尾音は**キクツ**の三種であるが、其中**キ**の尾音を伴ふ字音即ち**スキ、ツキ、ユキ、ルキ**に付ては、既に字音略字として決定して居るから考慮する必要はない。さうすると是亦殘る所のものは**ク**と**ツ**だけである、

けれども此の**ク**と**ツ**の尾音を伴ふ字音は僅に**ウツ、クツ、フク**＝**フツ**だけであつて、而も此の種の同行熟語略字法と應用の出來るものは僅に加行と波行だけであるから、此の略記號としては前節の伊段の**ウ**の字（**ー**）を兼用することにする。是は何故兼用するかと云ふと、其の略記號として適當なる線がないし、又共同に兼用しても、決して混同衝突するの虞はないからである。それは次に示す所の例題と、前の例題とを對照して考べるならば思ひ半ばに過ぎるものがあるであらうから精しい説明は要しないと思ふ。

例題

【加行】クツ　岩窟　窮屈

【波行】フク　フツ　萬物　反覆　被服・被覆　美服　不服＝普佛　平伏・平服　法服・抱腹・報復＝彷彿　方物・拋物　本腹

第五節　後字の頭音衣段に屬するもの

衣段即ち**エケセテネヘメレ**を頭音として成る字音は、其の尾音は**イキツ**の三種であるが、其の中**イ**の尾音を伴ふ字音の**エイ、ケイ、セイ**等の如きは速記學上では**エー、ケー、セー**等の如く長音化して取扱ふことになつて居るのであるから此の場合何等考慮する必要はない、當然省いて宜しい、さうすると殘る所のものは**キ**と**ツ**である。

此の**キ**と**ツ**の關係に付いては、前にも度々説明した通り、他の各段に於ては總て**ク**と**ツ**の尾音を共有して居るに拘らず、獨り此の衣段のみは**ク**の尾音がなくして、**ク**に代はるに**キ**の尾音を以て字音を構成して居るのである。

故に他の各段に於ては**ク**と**ツ**の尾音を有する字音を共通せしめて一の略記號を制定するのであるが、此の衣段に於ては**キ**と**ツ**の尾音を有する字音が共通せる一つの略記號を持つことになる。

それで他の各段に於ては一つの記號を讀み分けるのには、**ク**にあらざれば**ツ**、**ツ**にあらざれば**ク**と讀みかへて見れば宜しいのであるが、獨り此の衣段に限つて、**キ**にあらざれば**ツ**、**ツ**にあらざれば**キ**と讀みかへることを忘れてはならないのである。

そこで之に對する略記號は當然母音符のエ『ヽ』の字を以て充當すべきである。

例題

【加行】ゲキ ケツ　過激・歌劇＝花月・可決　感激・觀劇・間隙＝觀月・寒月　簡潔・間歇・完結・解決　活劇＝各月・隔月　碁月＝喜劇・詭激　既決　歸結・起結・奇傑・議決　金穴・禁闕　空隙　劍劇・劍戟　絃月・限月　固結・虎穴　攻擊＝豪傑・膏血・高傑　混血・今月　急激・舊劇　九穴・吸血　去月　矯激・夾擊＝凝結

【佐行】セキ セツ　砂石・座席＝挫折　史蹟　咫尺　事績・自席　次席・自責・磁石＝時節＝死絶　臣籍・親戚＝親切・深切・新設・新說　臣節・人跡　叱責・出席・實績＝實說　燧石　寸節　世說　成績＝淸節・妻絶　船籍＝前說　積雪　礎石・踪跡　送籍・僧籍＝鼠竊・創說・總說・叢說・壯絶　村設『拗音』砂石＝社說　謝絶　首席・酒席　終席・重責　書籍　除籍　證跡　硝石　上席＝小說・小節・詳說　定石＝常設　除籍＝叙說・饒舌　職責＝觸接

【多行】テキ テツ　端的　耽溺　智的　沈溺　點滴　轉轍　途轍　透徹　朝敵

【奈行】ネツ　なし

【波行】ヘキ ヘツ　判別　品別　分別

【麻行】メツ　磨滅　明滅

【也行】　なし

【良行】レキ レツ　羅列　來歷　履歷　凜冽　瘰癧　呂律　陋劣

第六節　後字の頭音於段に屬するもの

於段即ちオコソトノホモヨロヲを頭にして字音を構成する尾音は唯クとツのみであつて、他の尾音は一つもない。之に對する略記號は於段なるが故にオ『ノ』の母音符を以て充てるのが當然である。

例題

【加行】コク コツ　苛酷・過刻　勸告　寒國＝換骨　開國・海國・廻國・戒告・外國＝骸骨　各國　歸國・貴國・鬼哭＝氣骨・奇骨・肌骨　疑獄　近國・金穀＝筋骨　空谷・君國・軍國　傾國・警告＝輕忽・頸骨・脛骨　建國・嚴酷・原告＝拳骨　故國＝枯骨　五穀・

後刻　興國・皇國・公告・廣告＝硬骨・恍惚・刻々　急告・泣哭・舊國＝朽骨
擧國・强國＝俠骨

【佐行】ソク　左足　早速　山賊　催促　四則・四足・子息＝士卒　氏族・士族・使嗾・
ソツ　自足・時速　神速＝眞率　親族・迅速　失足　實測　推測　世俗・捿息・正則　税則
洗足　專屬　喘息　拙速　總則　裝束　草賊・相續・僧俗・宗族＝草卒・忽卒
社則　種族＝守卒　終熄　習俗　充足・充塞・從屬＝從卒・銃卒　消息＝將卒

【多行】トク　多讀＝多度津（應用）　耽讀　單獨　體得・胎毒　知德・知得　鴆毒
トツ　帝德・提督　轉讀　都督　統督　尊ク（應用）　中毒

【奈行】なし

【波行】ホク　敗北　婢僕　放牧・芳墨

【麻行】モク　滿目　瞑目・名目　盲目

【也行】なし

【良行】ロク　勞力

右の中には前字が撥音であり、長音であり、又はイ＝キの尾音を有するものは、第七章の一般

熟語の尾音省略法の中にもあるから、其の何れを採用するも可である。

要するに以上は、謂はゆる唯法則に過ぎないのであるから、法則は如何に巧みに制定せられてあつても、それは死物であつて自ら活躍するものではない、之を活かして用ひるのは人にある、之を用ひんとする人は何としても其の法則に依つて成されたるものを我が物としなければならない、我が物としようとするには、言ふまでもなくそれを相當の習熟を要する、故に煩を厭はず例題を多く掲げて練習の便に供することにした。

（終）

昭和十二年七月二十日印刷
昭和十二年七月三十日發行

日本速記法上に於ける
漢字音と其の略字法則の研究

定價 金五十錢

著者 安田勝藏

發行者 東京市杉並區上荻窪二ノ五六 齋田夙麿

印刷者 東京市板橋區板橋町六ノ八七八 高橋通盛

印刷所 東京市板橋區板橋町六ノ八七八 高橋印刷所

【複製轉載を許さず】

發行所 東京市麹町區永田町貴族院構內
振替東京五三五八三番
日本速記協會